355の語り部

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 京都市立芸術大学芸術資料館 公開日: 2025-04-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 松尾, 芳樹 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15014/0002000199

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 4.0 International License.

355の語り部

——京都市立芸術大学のコレクション

355の語り部

——— 京都市立芸術大学のコレクション

《目次》

1　絵を学ぶ道 …… 1
2　粉本と文書 …… 9
3　京の美術館 …… 17
4　工芸に学ぶ …… 25
5　学舎の証し …… 33

略年表 …… 40
資料目録 …… 43

《凡例》

1　本書は、京都市立芸術大学芸術資料館において令和元年9月17日から10月20日にかけて開催する「掛図と標本－美術工芸学校の教材」にちなみ刊行する収蔵品図録である。

2　本展覧会は、令和元年度文化庁地域の博物館を中核としたクラスター形成事業として行う、《「京都・大学ミュージアム連携＋」による「京都の伝統 Tradition of KYOTO」発信プロジェクト》のひとつである。

3　本図録は平成28年4月1日から平成29年3月31日まで京都新聞朝刊1面に掲載された「京都芸大　美を語る」の記事を、そのまま同じ内容、順番で収録するものである。ただし、図録の利便性を考え、掲載日は通番に置き換え、通覧に対応して項目名の体裁を整えた。各セクションの冒頭に記したリードは今回新たに補ったものである。

4　略年表は京都府画学校から京都市立芸術大学に関わる主な事項を編集しているが、新制高等学校に関する部分及び図録掲載資料と関わりの少ない近年の事項については最小限にとどめている。

5　掲載する資料はすべて京都市立芸術大学芸術資料館の収蔵品である。巻末に資料目録を付した。データは通番、名称、作者、備考、法量（縦×横×奥cm）形状、技法、収蔵番号以下の順に記す。

6　略年表および資料目録中に使用した略号は次のとおり。市美＝京都市美術学校。市工＝京都市美術工芸学校。美工＝京都市立美術工芸学校。絵専＝京都市立絵画専門学校。

1

絵を学ぶ道

明治13年、京都御苑内に仮校舎を以て京都府画学校は開校した。当初、教員が準備した絵手本による運筆の練習が主体であったが、明治後期になると、学校に四条派の系譜に連なる教員が増し、写生を重視する傾向が強まっていく。さらに、教員の欧米渡航が西洋の美術に対する視界を広げるようになると、毛筆による新しい写生表現が模索された。一方、従来から学画の方法として繰り返された模写は、明治中期になると文化財保護の視点も加わり、重視されるようになる。学校では教材として収集するために、卒業生に委嘱して多数の模本を制作したが、これは若き画家の学習の糧ともなった。

001 1880年頃

幸野楳嶺《玉図》

1880年に開校した京都府画学校には東宗西宗南宗北宗の四つの教室があった。本図は線描を重視する漢画系の教室とされた北宗最初の課程第六級の運筆手本。玉の図は画家が年始の試筆によく描いた画題。諸派が用いた。

002 1880年頃

幸野楳嶺《白もくれん図》

瑞々しい線描と構図が印象的な手本。北宗の初等教育である第五級の教材。画学校では、教育用絵手本は教員の自筆と定められていた。楳嶺は中島来章に円山派を、塩川文麟に四条派を学ぶ画家。しかし教員を務めた期間は短い。

003 1881年頃

鈴木松年《羅漢図》

楳嶺の後北宗教員となったのが諸派を折衷した鈴木派の松年。健筆で知られ、羅漢図を得意とした。人物画の臨模は第三級の課題。長く教鞭を執ったが、後に応用画学科の設置に際し、工芸家への教育に難色を示し辞職した。

004 1880年頃

望月玉泉《椿図》

画学校東宗では写生画や大和絵を学ぶ。本図は新入学者が使用する第六級のお手本とされ、開校以来教員を務めた望月玉泉の手になる。典型的な付立てによる運筆は諸派で用いられる。唐紙ならではの墨の含みを習得させた。

005 1880年頃

望月玉泉《蜥蜴図》

軽妙な付立を組み合わせて描かれた蜥蜴は、東宗入学２年目後半にあたる第三級の教材。当時は半年刻みで等級が上がり、期末には進級試験に合格する必要があった。平均の年齢でいえば15歳でこの手本を臨模することになる。

006 1880年頃

望月玉泉《蜻蛉図》

東宗第四級の臨模手本。大胆な構図だが繊細な写生に基づく。本来の教則では墨絵のはずだが没骨着色画となり難度が増している。西宗を除く日本絵画の教室では東宗のみが卒業生を出す。最初の卒業は幸野楳嶺門下の西川桃嶺。

007 1881-88年頃

鈴木松年《唐子遊亀図》

東宗は望月玉泉が担当したが、一時期北宗の松年による指導を受けたことがある。手本は教員が制作するため、最上級である第一級の手本として松年が人物図を制作した。画学校は３年修学して第一級を終えると卒業となった。

008 1881年頃

池田雲樵《竹図》

文人画を教える南宗の教程は９年である。これは近世の画家の修学期間に近い。３年の課程を下等中等上等と３回行うが、卒業生は出なかった。竹は四君子のひとつ。蘭とともに下等第六級という最初の教程の教材とされた。

009 1881年頃

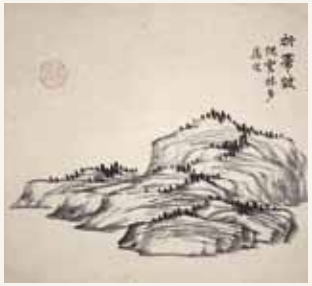
池田雲樵《蘭図》

蘭には24枚の手本が用意された。『芥子園画伝』など画譜類も参考にしつつ、簡単なものから複雑なものへと段階に工夫を加える。本図は応用にあたる21枚目のもの、「著雨立風」の画題があり、初学者でも画中に気分を描かせる。

010 1881年頃

池田雲樵《人物十八描法(蚯蚓描)》

中国明代に汪砢玉が論じた十八描法は、日本では主に人物を描く線描法として理解される。近代になってもまだ命脈を保ち、学習の対象となった。雲樵は漢学の素養ある武家出身の画家。明治初期に伊賀から京都に移った。



011 1986年頃

巨勢小石《岩図》

小石は画家の系譜を持つ巨勢家の末裔。岩の手本は下等第四級で樹木とともに学ぶ。山水画の部分表現を学ぶ教程で、皴法もこの段階で学ぶ。池田雲樵の後を受けて南宗の教員となった小石は全ての絵手本を新たに制作した。

012 1886年頃

巨勢小石《山水図》

中国清にも渡り見聞を広めた小石は、画学校の後、東京美術学校の教員も務めた。山水は南宗下等第二級の教材で、中間まとめのような役割を持つ。「林亭遠岫」の題が付けられ、技術よりも表現意図を明確にする視点がある。

013 19世紀

《CORPUS CHRISTI DAY》

画学校において西洋画と図法を教えた教室が西宗。小山三造に続き田村宗立が教員となる。四宗の中で最も人気があり多数の卒業者を出すが、1889年に廃止された。ドイツ製のこの版画は、西宗の教材として唯一遺るもの。

014 1888年頃

幸野楳嶺《弾琴図》

1888年の画学校の改組により四宗は廃止され、東南北の三宗は東洋画として合併される。楳嶺はこのとき嘱託教授に復帰し、再び絵手本を制作する。「疎」とあるのは習作を分類したものらしく、やや難度のある臨模手本である。

015 1888年頃

幸野楳嶺《草花図》

改組後の画学校では、普通画学科、専門画学科、応用画学科と教育課程が分立したため、絵手本は科目別に仕立てられた。「白」とあれば白描つまり線描を中心とした運筆用。本図のように「勾」とあるのは鉤勒填彩すなわち着彩画の骨書用とした。

016 1888年頃

今尾景年《啄木鳥図》

画学校の改組により、修学期間が５年と延びて学年制となり、複数の画家が分担して教授するようになる。この時短期間だが画壇の重鎮岸竹堂と、花鳥画で知られる今尾景年が嘱託教授に就いた。本図は二年生の教材として制作された運筆用の手本。

017 1888年頃

幸野楳嶺《梅花図》

応用画学科には３年で卒業する速成科が作られた。工芸家の子弟らの教育を行う課程として、図案家教育のための教材といえる。しかし、絵画教育の初歩的な運筆手本がそのまま使い回され、図案教育への特別なまなざしはない。

018 1888年頃

森寛斎《藤図》

京都には如雲社という画家の親睦団体があった。設立者のひとり塩川文麟が亡くなると、大阪の森狙仙の系譜を受ける寛齋がそのまとめ役となる。画学校でも講義をすることがあり、長老格でありながらも、初学者の臨模用絵手本制作に加わった。

019 1904年

竹内栖鳳《雀》

幸野楳嶺の弟子栖鳳は、画学校の後身となる美術工芸学校の教育の要である。栖鳳が尊ぶ尚筆が冴える本図は、画面中央に四羽の雀を手堅く描写し、右から五七三の配分に並べて構図を整える。学習すべき内容を明確に設定して運筆だけで済ませない。

020 1904年

竹内栖鳳《馬》

奔馬というには短足の日本馬で滑稽さがある。絵馬に描かれる馬を彷彿とさせ、古画を意識したのだろう。しかし唐紙の性質を活かした裸馬の量感と手綱の軽妙な線が感じさせる速さの対比はよく工夫されており、曖昧な輪郭を蹄の濃墨が引き締める。

021 1904年

竹内栖鳳《鶏》

破墨表現を課題とした絵手本。墨面の形状と濃淡によって、形態の再現より、量感や運動性を印象付ける。対角線を生かした構図は一見静的だが、朱と墨の色彩の対比と面と線による用筆の対比を見せており、小品ながらよく教育効果が考えられた手本。

022 1904年

竹内栖鳳《髑髏》

栖鳳が渡欧して西洋の美術と出会い、帰朝後人体表現に挑戦したことはよく知られているところ。しかしそれ以前から写生によって人体を構成する骨格の研究を行っており、外隈と洋画風の陰影表現を組み合わせたこの手本に成果が見られる。

023 1903年

竹内栖鳳《牛》

四条派、円山派という二つの写生画の流れを受ける栖鳳ではあるが、牛の量感や抜けるような青空から降り注ぐ光が描かれ、新しい表現の模索を示している。絵手本の目的が、運筆など技術の習得ではなくなったことを教える手本。

024 1903年

山元春挙《黄蜀葵》

森寛斎の弟子春挙は、栖鳳とともに学校教育の中心にいた。春挙の手本には硬質な写実が見られ、用紙は滲みを嫌う。本図は絵具による没骨画。花と葉が作る大きな三角形が形と色彩双方の構成の中心となり、運筆に動きがある。

025 1903年

山元春挙《松蕈》

写真も得意とした春挙らしく、画面に空間の認識を取り入れることが課題。落ち葉の中の松茸には陰影が描かれていないが、周囲は柔らかな光に包まれ、空気を描く工夫がある。松葉の複雑な重なりが空間に現実感を与える。

026 1903年

山元春擧《栗にひたき》

花木小禽の画題は各門流の定番。画家は様々な組み合わせを試みた。本図は対角線を生かした構図の中に空気を描く。写真的なのは、滲みを嫌った透明感のある付立ての硬質な感覚から。ひたきを基点に栗葉が作るリズムが快い。

027 1902-03年

山元春挙《月に竹》

月を囲むように竹葉で大きな三角形を描き、見る者の視線を引き寄せ、画面に動きを作り出す。墨には藍と黄土を混ぜて緑味を加え厚みをつける。竹という画題は付立ての教材を想起させるが、運筆ではなく画作の手本とした。

028 1906-08年

谷口香嶠《柿実》

香嶠は幸野楳嶺の弟子。故実に詳しく、工芸図案に見識があり図案科の教員でもある。枝はわずかにたわみ、柿実の重さを受け、果実はくるりと線をひいて丸みを伝える単純さ。あまたの試筆のあとが、生徒の迷いを伝える。

029 1906年

谷口香嶠《秋海棠》

藍と臙脂と雌黄を用いた絵具による没骨画。写生に基づきながらも面と線を組み合わせた構図は理詰めである。絵具の潤いと紙の性質の理解を求めているところに、従来の運筆手本から教材としての要求が高度になっている。

030 1904年

谷口香嶠《つるもどきに目白》

横長構図を学ぶ絵手本。大きなS字状の蔓が構図の要所。目白を中心にして、左右に三角形の構造を作り、均衡をとる。褐色を基調に色彩を抑制した潤いのあるなめらかな筆は、空気の存在を感じさせ、見る者の視線を画面の端から端まで誘導して広がりを伝える。

031 1906年

菊池芳文《山さくら》

幸野楳嶺の弟子芳文は、桜の名手。画面の下半に要素全てを集めた構図は、生成りの紙の風合いを生かす。透明感のある墨色によって実は空間を主題とした手本とわかる。運筆手本から絵づくりへの応用を見せる教材である。

032 1909年

菊池芳文《藤に燕》

唐紙の生成りの色が、燕の黒と藤花の白の対比を支える。連筆によって最初に描かれた太い枝は力強く、はじき出るような燕の姿によって、画面全体に回転する運動性を与えている。芳文の手本は空間の把握が意識される。

033 1906年

菊池芳文《鴛鴦》

絹本に着彩した習作を絵手本とした。絹本の場合下絵が必要となるため、運筆のみならず下絵制作も含めた作画の構想が教授の対象である。広く開けられた右側の空間を生かすための工夫が、左上の水辺に連なる鴛鴦の造形の細部に結集されて巧みである。

034 1908年

川北霞峰《桜に目白》

菊池芳文を師とする霞峰の絵手本。臨模の際に付けられた汚れがおびただしい。絹本による習作として構図法の学習に用いられたのだろう。目白の視線と枝の方向性が関連付けられる。京都の写生画の緻密な構成の伝統を見せる。

035 1910年

川村曼舟《月に千鳥》

師山元春挙の写実を継承する曼舟は絵画専門学校の校長も務めた。本図は絹本の透明感を活かした夜景。望遠鏡で覗くかに大きく描かれた月に飲み込まれる千鳥だが、その翼の方向性は月の輪郭に関連付けられ緻密である。

036 1900-04年頃

仲芳暁《柳にかわせみ》

四条派の流れには幸野楳嶺に至る系譜のほかに森川曽文から三宅呉暁に至る師承もある。芳暁は呉暁の弟子で、若くして画壇を去った。本図は呉暁の手本を受けた教材だが、大胆な運筆の中に風と枝のしなりと餌を狙う翡翠の緊張を描いて作者の才能を物語る。

037 1872年

田能村直入《呂洞賓図(郭存仁)》

画学校の開設を最初に京都府に陳情した直入による中国明代絵画の模本。初代摂理すなわち無給の校長をつとめた直入の寄付品である。絵画の模写は古くから学画の要所であり、模本の収集は絵画教育に欠くことはできなかった。

038 1779年頃

田中訥言《加茂祭草紙》

画学校が開校した当初に購入された模本。ここから写本の収集は始まった。訥言は復古大和絵の画家として知られ、剥落の模写まで行う現状模写の草分けのひとり。本作は葵祭の名で知られる加茂祭を描く中世絵巻の模本で、訥言模本など写本のみが伝わる。

039 江戸前期

狩野探幽《葡萄図(日観子温)》

資料として明治中頃に購入した模本。手本ではなく鑑賞のために収集された。探幽は江戸前期の狩野派の画家として著名。《探幽縮図》により古画を数多く記録することで知られる。本図は中国宋元時代の禅僧日観の葡萄図を精写した。縮図とは異なり風韻を伝える。

040 江戸後期

円山応挙《桃李園図(仇英)》

原本は知恩院が所蔵する明代絵画。印影から円山派の祖応挙による模本とされる。大幅にもかかわらず、細部まで緻密に写し取り、色指示の書き込みも多い。応挙の絵に見られる支那臭の拠り所をうかがわせる。明治末期に購入。

041 江戸後期

百鬼夜行絵巻

真珠庵本として知られる重文絵巻と異なる系統の百鬼夜行絵。高山寺の鳥獣戯画のような動物の妖怪が登場する。原本は室町時代の物語絵と考えられているが、詞を欠く。明治後期には校内に歴史や故実への興味が高まり、近世の模本が積極的に購入された。

042 江戸後期

付喪神絵詞

古い道具たちが付喪神となって人間を襲い、享楽を尽くすが、調伏され成仏するという物語。室町時代に成立したとされ、原本は遺らず、諸種の写本が流布する。良質の顔料を用いた美しく細密な模本で、明治中期に物語絵の写本として最初に購入された。

043 1792年

谷文晁《荏柄天神縁起》

原本はメトロポリタン美術館本北野天神縁起絵巻とされる。伊豆の般若院の什物を、緻密な模写を行うことで知られる文晁が写した。後に松平定信『古画類聚』の資料ともなっている。大正期に購入された本作以後、物語絵の近世写本購入は減っていく。

044 明治時代

森川曽文《二十四孝図(狩野山楽)》

四条派の森川曽文は、改組後の画学校で教員を務めた。絵手本を制作する傍ら、押絵貼屏風と思われる狩野山楽の二十四孝図を細部まで丁寧に写し取り、学校に寄付している。図は元角の故事で、珍しい説話が採用されている。

045 1889年

河辺華挙《翠簾草花源氏絵屏風》

華挙は円山派土佐派狩野派などを折衷して一家をなした。東京大学総合研究博物館に膨大な鳥の写生粉本集が遺る。改組後の画学校で一時教員を務め、本図は御簾に擬えただまし絵風の屏風模本。写生に劣らず緻密な模写を見せる。

046 1898年

北野天神縁起（承久本）

北野天満宮が所蔵する国宝絵巻。天地52センチの大画面そのまま詞に至るまで８巻全てを模写する。図は巻四から太宰府配所。美術工芸学校の絵画科卒業生が描いたと思われる。明治後期以後、卒業生の支援と教育資料の充実を兼ねて、模写の依頼制作が増した。

047 1899年

大徳寺大仙院　花鳥図（狩野元信）

狩野元信が大徳寺大仙院方丈に描いた襖絵の模本。美術工芸学校の卒業生が、狩野派の手になる画面ばかり29面を模写した。同じ場面を彼らの教員をしていた菊池芳文も写している。障壁画模本は当時意識的に収集された。

048 1899年

吉村青霞《一遍上人絵伝(歓喜光寺本)》

原本は神奈川清浄光寺が所蔵する国宝。詞も含め12巻が揃う。図は巻六から富士山。青霞ら美術工芸学校絵画科卒業生により、旧蔵者歓喜光寺において模写された。当時の教員は竹内栖鳳、谷口香嶠、菊池芳文ら幸野楳嶺の弟子。模写教育が再認識され始める時代である。

049 1899年

伝源頼朝像

原本は高雄神護寺所蔵の鎌倉時代肖像画の名品。伝藤原光能像、文覚上人像、伝平重盛像、伝源頼朝像伝の順に模写しており、重要なものを後に回して、技術を蓄えながら制作にあたる。これも絵画科卒業生による模本のひとつ。

050 1900年

醍醐寺五重塔板絵　龍智像

原本は京都醍醐寺の五重塔初層内板絵。心柱覆板をはじめとする胎蔵曼荼羅と羽目板の真言八祖像の一部を写す。絵画科卒業生への参考品依頼制作のひとつ。原本からの模写が時間の制約の中で行われたことは未完成の部分が物語る。

051 1900年

田中親美《伴大納言絵詞　上巻》

親美は古画古筆の研究者として知られ、多数の模本を遺している。父田中有美が画学校出仕という縁もあり、親美は美術工芸学校に幾つかの模本を収めている。本作は学校の依頼に応じて、当時酒井家が所蔵した国宝絵巻３巻全てを、密度のある現状模写したもの。

052 明治時代

伝　田中親美《年中行事絵巻》

原本は平安時代の絵巻だが、江戸時代に住吉如慶、具慶親子が制作した模本が伝えられる。全18巻のうち白描で描かれる後半９巻分の複模が揃う。本図は祇園御霊会の巻。模本を所蔵する田中家で制作されたもので、独自の巻構成を取る。親美からの購入品。

053 明治時代

伝　田中親美
《源氏物語絵巻徳川美術館本》

親美の関わる模写事業の中でも著名なのが、明治後期に行われた旧益田家本源氏物語絵巻１巻と、昭和初期に行われた徳川家本３巻の模本制作である。本作は徳川本の甲巻を欠く３巻。作者を明記しておらず、昭和模本との関係は不明だが、親美から購入した。

054 明治時代

菊池芳文・谷口香嶠
《随身庭騎絵巻》

大倉文化財団所蔵の似絵の名品を、幸野楳嶺の弟子２人が共同制作した模本。明治後期になると教員の手になる模写参考品も増える。香嶠は故実に詳しく、京都の歴史画の第一人者。厚めの紙を用いた質感のある模本ながら、上げ写しによる線描は繊細で勢いがある。

055 1899年

西山翠嶂《柳に葵図(呂紀)》

翠嶂は美術工芸学校を卒業、絵画専門学校の教員となり、校長をつとめ、文化勲章を受章するという、生え抜きの王道を歩んだ画家である。師竹内栖鳳から模写の研究姿勢を学び、妙心寺において中国明代絵画の原本から写した。

056 1911年

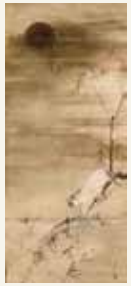
徳田隣斎《達磨(狩野芳崖)》

隣斎は竹内栖鳳の弟子。美術工芸学校と絵画専門学校で指導にあたり、師栖鳳の作品を多数模写して学校に遺す。原本は東京美術学校が所蔵する芳崖作品のひとつ。この頃美術工芸学校から東京に出向き、盛んに模写制作を行っている。

057 1913年

竹内鳴鳳《扇面古写経》

原本は平安期の雅趣を伝える装飾経として知られる。東京国立博物館所蔵の寺崎廣業・小堀鞆音の模本は、原本に見える経文も切箔もなく図様が見やすい利点がある。本作は竹内栖鳳を父に持つ鳴鳳による複模本。戦後は初心者むけの教材としてよく利用された。



058 1910年

榊原紫峰《月下猫児(岸竹堂)》

絵画専門学校第１期生の紫峰が学生時代に行った模写。原本は日本美術協会展で受賞した竹堂の代表作。後に入江波光が学生の手本用に複模を多数制作した。戦後に紫峰は文化庁の鳳凰堂壁扉画模写事業を菊池契月とともに指導。

059 1912年

村上華岳《釈迦成道図》

華岳は絵画専門学校1期生。後に国画創作協会結成に加わる。原本は東京美術学校の所蔵。研究科時代、現地に赴き制作した。模写が苦手な華岳らしく、模本に個性が表れる。彼の仏画への興味はこの頃すでに生まれている。

060 1911年

入江波光《阿弥陀聖衆来迎図》

原本は高野山にある平安仏画。波光を中心とした学生により模写された。手本としたのは現在東京国立博物館にある下村観山、本多天城、溝口禎次郎らによる模本と思われる。当時多かった京都から東京に出向いての研修成果。

061 1912年

入江波光《十二天像　水天像》

原本は京都国立博物館が所蔵する平安仏画の名品。絵画専門学校卒業後、研究科生となった波光が制作した。彼は模写そのものを表現として研究。手本の上に載せた紙を巻き上げながら現状模写する上げ写しの技法を追求した。

062 1922年

二宮一鳩《飛天図》

絵画専門学校の２期生一鳩が後輩の佐野一星とともに学校から依頼されて制作した模写。飛天図５面と阿弥陀像４図がある。原本は日野法界寺阿弥陀堂の壁画として著名だが、絵は極めて高所にあって薄暗く、足場が必要である。現状模写には大きな苦労があった。

063 1933年

入江波光《駿牛図》

原本は東京国立博物館の所蔵。絵巻の断簡である。1928年の国画創作協会の解散後、模写による古画研究に専心しはじめた頃の波光の代表作。上げ写しの技術を完成、精緻の限りを尽くし原本の風韻を写し取る態度が表れる。

064 1939年

入江波光《一休和尚像(没倫紹等)》

原本は東京国立博物館が所蔵。一休の肖像として著名だが、実は紙型と呼ばれる下絵とされる。波光は旧蔵者の岡崎正也氏のもとで制作した。この模本から多数の複模が制作され、台紙貼り込み手本となり、はじめて模写に取り組む者が用いる教材となった。

065 1931か36年

林司馬《盛安寺客殿襖絵菊籬図》

盛安寺は滋賀県大津の天台寺院。客殿の襖絵は17世紀の絵画として知られる。他に要樹平、中本秀夫、松野幸信、後藤貞之介ら多数の絵画専門学校卒業生が参加し、18面を写した。教科書的ではなく教育資料を集める選択眼が鋭い。

066 1950年

林司馬《明恵上人像》

司馬は絵画専門学校から改称した美術専門学校の教員となり、入江波光の模写研究を継承。新制大学後の模写教育を担う。原本は高山寺が所蔵する国宝の肖像画。司馬も気に入った作品らしく、複数の模本の存在が知られる。

067 1948年

林司馬《法隆寺金堂六号壁観音菩薩像》

入江波光の業績として知られるのは、法隆寺金堂壁画の模写である。それは壁画の焼損という悲劇を迎えるが、幸い入江班の模本は難を逃れ今も遺る。模写の助手をつとめたのは吉田友一と司馬たち。巨大な画面を上げ写しで写した。

068 1937年頃

林司馬・吉田友一
《応挙写生図巻(円山応挙)》

原本は円山応挙の手になる写生の清書本。千總の名で知られる西村総左衛門家が所蔵する。総左衛門は長く美術工芸学校の商議員をつとめ、学校と縁が深い。この模本から司馬、友一により数種の抄出本が作られ、台紙貼り手本として、現在も使用される。

069 1938年

吉田友一《西行物語絵巻》

原本は蜂須賀家の旧蔵品で現在文化庁が所蔵する。友一のほか林司馬・中島悠翠・吉田義夫が分担して制作する。入江波光の下で模写を学んだ学生の中でも、特に緻密な仕事を遺す４名である。本作から中級者向けの台紙貼り模写手本が制作され、長く利用される。

070 1932年頃

吉田友一《北野天神縁起(弘安本)》

原本は北野天満宮や東京国立博物館などに分蔵される鎌倉時代の絵巻。入江波光を中心に模写を行い、正本を所蔵者に収め、別に副本も制作した。本作は友一と林司馬が中心となった副本。場面構成は錯簡を改めている。現状模写を極限まで追求した成果である。

071 1977年

岩井弘《女史箴図巻(伝顧愷之)》

原本は中国古代絵画の模本として著名。近代では小林古径、前田青邨による模本がある。京都市立芸術大学の時代に、原本所蔵者である大英博物館の協力を得て、弘と岩倉壽、木下章が、現地で原本に臨んで制作した。弘は林司馬の後任として模写教育を継承する。

2

粉本と文書

学校の歴史の中で様々な記念物が遺る。偶然の重なりによって幸運にも伝えられたものは少なくない。これらは個々の物としての価値以上に、その背景にある出来事が重要である。書類から門標に至るまで多様な形状の記念物は校歴資料として今日保存の対象となっている。また、資料館には近代の美術家の素描群や、土佐派絵画資料、田村宗立旧蔵粉本など近世以来の膨大な粉本類が絵画の制作資料として収蔵される。これらは、教育活動や展示公開になじまない性質を持つが、構造化して文書として整理することにより、歴史研究の資料として活用される。

072 1889年

明治22年11月調校有品取調事件

変哲もない物品目録。実は、生まれたばかりの京都市へ画学校を移管する際に調査した校有品のリストである。当時は台帳整備が不十分なため、初期の教育内容を知る貴重な資料となる。落ち穂を拾うように文書から歴史を拾う。

073 1876年

レガメー《槇村正直像》

画学校開校時の京都府知事である。衰退した京都の産業活性化のため、「京都策」と呼ぶ産業振興策に関わった。1876年パリからやってきたギメー一行を出迎えた正直を随行画家レガメーがコンテを使って速写。槇村からの寄付。

074 1878年

田能村直入《画学校起校上書》

直入が京都府知事に宛てた画学校開校を陳情する書面。全てはこの１枚から始まった。大阪から来た南画家に先を越された体の京都の画家たちは、慌てて建議書を起草し、これに続く。この時直入はすでに旅の空にあり、寄付を集める行動を開始していた。

075 1879年

遠藤茂平《画黌資金献納願書》

画学校のための寄付は思うように集まらなかった。開校前、知事は勧業場に京都府内の産業関係者93名を集め、寄付を募る。この文書は図案家からの寄付の願出書だが、85円を42年の分割払いで寄付する旨が記される。気持ちはあるが、財布がついてこない。

076 1880年

幸野楳嶺《龍馬負河図図》

仮校舎ながら御所内に画学校は開校。京都の画家のとりまとめに苦労し倒れた楳嶺も晴れの日に記念揮毫する。古代中国伏羲の世、黄河に表れた龍馬の背に描かれていたのが河図。八卦の図である。絵図の起源を以て開学を祝った。

077 1881年

田能村直入肖像写真

当時画学校は直入の学校と見られていた。直入の構想する学校は、画家と商工家から集めた寄付によって基金を作り、その利子で運営し、生徒の学費は無料とするものである。しかし資金は不足し、船出から理想とは乖離した。

078 1880年

幸野楳嶺《画学校建築案図》

画学校の開校予定地は、御所の東南隅とされた。田能村直入と楳嶺が建築平面を描いている。藩校風の直入に対し、運動場や花卉園を備えた近代的な楳嶺という対比が面白い。産業界へ配慮したのか楳嶺の図には校地南西に工業所と呼ぶ依頼品製作の工房が見える。

079 1888年

大角成充《光論教本》

画学校の教育について、絵手本による実習以外は、ほとんど分からない。これは光学に関わる講義用教本で、当時の学科の授業を直接伝える唯一の資料となる。改組直後、東洋画と対置された西洋画の専門画学科で使用された。後進となる猪飼嘯谷の筆写本も遺る。

080 1895年

美術工芸学校制服着用写真

美術工芸学校に制服の制度が生まれるのは1888年。この制服はその後定められたもの。着衣の主は後に漆工家戸島光孚となる。当時東京美術学校でも古風な制服が定められたが、どちらも人気がなくあまり着用されなかった。

081 1893年

御所御苑内東南隅校舎新築記念写真

御所東南隅の敷地を宮内省から期限付きで借地し、念願だった自前の校舎が建つ。これは校地中央の事務棟を背にする集合写真。左下に画学校以来共学が続く女子生徒の姿も見える。施設を得て本格的に図案家教育が開始。美術工芸学校の名が実を伴い始める。

082 1904年

セントルイス万国博覧会金牌

画学校の時代から学校は度々国際博覧会に出品した。その意味では今以上に国際的である。日露戦争の最中に米国で開催されたこの万博では、従来のジャポニズムの要素に加え、国家の近代化の指標として絵画教育が展示された。

083 1909年

谷口香嶠・猪飼嘯谷《本邦風俗図》

図案科の教員だった香嶠と嘯谷は、歴史風俗画家でもある。師弟２人が共同で製作した14軸からなる教育用掛図が本作。適切な参考資料がない時代、教員は自ら研究して教材を制作した。歴史への関心は校内に高まっていた。

084 1928年頃

北垣国道肖像写真

今熊野校舎の講堂には歴代校長の肖像写真が飾られた。その中になぜか元府知事北垣国道の顔も並ぶ。彼は学校に岡崎の田畑を寄付、その土地は第４回内国勧業博覧会の会場として売却され、吉田校地を得る原資となった。恩人である。

085 1910年頃

美術工芸学校・絵画専門学校校舎写真

吉田校地は東一条通に面した現在の第四錦林小学校の場所で、御所東南隅校地に比べれば倍の規模である。はじめて土地建物全てが自前となった。堂本印象や福田平八郎ら後に文化勲章を受ける卒業生の大半はこの校地に学ぶ。遅れて建つ講堂は大礼建築の払い下げ。

086 1910年

絵画専門学校授業風景写真

吉田校舎の授業風景。絵画専門学校が金牌を得た日英博覧会の出品写真である。椅子に座り画架を用いる制作風景は、1902年に座業から改められたもの。開設されたばかりの絵画専門学校は、美術工芸学校の施設を間借りするところから始まった。

087 1911年

絵画専門学校第１回卒業写真

土田麦僊ら近代日本画の俊才と竹内栖鳳ら画壇の重鎮が並ぶ。1918年の国画創作協会結成に関わる人物が多い。別科と本科の卒業生が交じるが、本科が美術工芸学校からの進学者。別科は実技の聴講生で学科を学ぶこともできた。修了は実技により認めた。

088 1916年

西村霞明《結髪風俗図》

谷口香嶠が学校を退く頃、歴史画教育に動きが生まれた。歴史故実の研究者として新たに江馬務、猪熊浅麻呂が教壇に立つ。霞明は絵画専門学校の学生で９軸の掛図を制作。当時の学校は有職研究の拠点のひとつになった。

089 1910年

美術工芸学校写生実習風景写真

吉田校舎のアトリエ棟は、その細長い構造から三十三間堂の愛称で呼ばれた。その手前中庭に広がるのが花卉園。絵画科も図案科も写生を尊重したため、生徒はここで研鑽を積む。1921年写生と伝統について教員間の論争があった。時代の節目である。

090 1911-20年

旧教員漆皿下絵帖

大正期には、学校の記念行事で関係者に配るため漆の隅折皿が作られた。これには教員の下絵による装飾が施され、下絵は画帖となって遺る。下絵は着彩画、これが金銀の蒔絵や漆絵に変換される。図は西村五雲の「人形お染」。総数97図。画家が工夫を競う。

091 1944年

中井宗太郎肖像写真

中井は国画創作協会の結成時、竹内栖鳳とともに後ろ盾になった美学者。学者生活を絵専と共に送る。俳諧美学を論じた中川重麗とともに、大正昭和期の学生に精神的影響を与えた。２人は校友会誌『美』の重要な論客であった。

092 1926年

絵画専門及美術工芸学校新築落成記念絵葉書

吉田校舎は20年で今熊野校舎に移転することになる。移転を巡って校内に対立が生まれ、多数の教員が辞表を提出する事件に発展した。絵専騒動である。校長藤代禎輔と教員竹内栖鳳・山元春挙の退任で事態は収束するが、学校と画塾の関係もけじめが問われ始める。

093 1926年

今熊野校舎玄関扉装飾ステンドグラス

今熊野校舎の建築直前に関東大震災があったため、コンクリート製の校舎は極めて堅牢に。設計は京都市だが、新様式のアールデコの意匠を随所に取り入れる。輸入品のガラスを用いたステンドグラスは玄関の扉4枚に嵌められた。

094 1928年

名古屋城障壁画写真

中井宗太郎、中村大三郎と石崎光瑤が学生と共に名古屋城本丸障壁画を調査した。この時光瑤が中心となって襖絵を撮影、写真は教材として利用された。本丸は後に空襲で焼失し、撮影した絵画の一部は疎開できず焼失している。

095 1950年

長崎太郎肖像写真

絵画専門学校の後身美術専門学校の大学昇格時、校内に騒動が起こり多数の教員が辞職した。事態を受け、学校の立て直しを託されたのが長崎。ブレイクの版画をはじめとする彼が収集した英米文学書は後に本学の蔵書となった。

096 1950年

須田国太郎《馬墨画》

長崎太郎の学校立て直しの際、美術専門学校から新たに専攻に加わった富本憲吉らの工芸科、黒田重太郎らの洋画科、辻晋堂らの彫刻科の果たした役割は大きい。教員の顔ぶれは改まり、新教員となった須田が檜板に墨と白絵具で大学開学の記念揮毫を行う。

097 江戸前期

土佐家《土佐光信像》

光信は大和絵の流れを受ける土佐派の中興として知られる。図は江戸前期に制作された肖像粉本。粉本は下絵など東洋絵画の制作に関わる資料の総称である。土佐家は大正期に廃業するが、累代継承された粉本の一部は本学に遺る。

098 1550年

土佐光茂《足利義晴像》

室町幕府12代将軍の肖像である。顔の部分に紙形と呼ばれる面貌下絵を貼り付ける。義晴は戦乱の中しばしば近江に逃れた。穴太で病に倒れた時光茂を呼んで紙形を描かせたことが記録にある。この肖像は、その清書と思われる。

099 1567年

土佐光吉《足利義輝像》

室町幕府13代将軍を描いた紙形である。土佐光茂の弟子光吉が描いた。国立歴史民俗博物館などに遺る義輝肖像画の原型がこの紙形。本画では穏やかな表情の義輝も、険しい顔つきと多数のあばたがありのままに描かれる。

100 1573年

土佐光吉《三好義継像》

戦国時代の歴史に翻弄され25年で生涯を終えた義継の肖像粉本。23歳時の姿を光吉が描く。文書の紙背を使用し、全身図に面貌部のみを描いた紙形を貼り付け下絵とした。当時の肖像画では身体部分の流用は珍しくなかった。

101 1609年

土佐光吉《七十一番職人歌合》

光吉は近世土佐家の祖となる人物。戦国の騒乱の中、堺を拠点として活動し、土佐派の画系を守った。職人歌合は公家が職人の歌合わせに擬えた創作。土佐家でも重視され、土佐光信の作と伝えられる本図から絵のみ白描で抄出した。力強い線が時代をもの語る。

102 桃山時代

土佐光吉《茜屋宗佐妻図》

肖像の家としての自負は、土佐派を継承する光吉にもあった。堺を拠点とした光吉は堺衆との交わりがあり、彼らの肖像をしばしば描いた。その対象は母や妻にも及ぶ。茜屋宗佐も有力な堺衆のひとり、茶人としても知られた。

103 桃山時代

土佐光吉《今井宗久像》

宗久は堺の商人にして茶人。千利休、津田宗及とともに茶湯の天下三宗匠のひとりとされる。光吉による肖像粉本のひとつだが、中世風の硬質な線描が薄れ、柔らかさを見せ始めている。宗久肖像としては数少ない信頼性のある図像。

104 桃山～江戸時代

土佐家《肖像画帖》

肖像は生前に描かれるとは限らない。むしろ像主の死後その家族や家来衆が遺影として求めることが多い。面貌の紙形が生前に準備できなければ似た人物を探す。対面写生した紙形は捨てることなく冊子に貼り込み参考資料とした。

105 1638年

土佐光起《土佐光則・光吉像》

堺を拠点とした光吉は京都に戻ろうとはしなかった。実行するのは子の光則の時代である。この肖像は光吉の孫光起が、父光則と祖父を並べて描く粉本。紙形から清書した。泉下の祖父像は父の指導だろう。土佐家では光吉の肖像以後代々当主が先代遺影を描く。

106 1676年

土佐光成《柿本人麿像》

土佐家が描くのは現実の人物に限らない。近世には歌聖として崇敬された人麿もまた多数描かれた。これは光起の子光成が極めを依頼された際写したもの。持ち主の希望で信実筆の極めを書く。根拠はないが時代はよいとした。

107 1698年

土佐家《弁才天像》

土佐派は仏画をあまり描かない。ただ、弁才天の粉本は多数遺り、福神としての需要があったらしい。この図は鑑定のため持ち込まれた絵の写し。土佐光信の娘で狩野元信の妻となった千代の筆とする。中世でも有名な閨秀画家である。

108 1672年

土佐光成《寒山像》

中世以来風狂の隠者として禅家に親しまれた寒山は、道釈人物画の画題としても人気があった。土佐家に寄せられる鑑定依頼品の中にも多く見られ、漢画にもかかわらず光成、光祐が雪舟、明兆、可翁といった極めを発行した。

109 1723年

土佐光芳《片袖縁起絵巻》

大和絵の本流を自負する土佐家にとって絵巻の制作は家業の要所。光成の孫光芳の時代、多数の絵巻粉本を所蔵していたことが将軍徳川吉宗に提出した目録に記録される。光芳自身も積極的に絵巻を制作、この下絵は大念仏寺のために描かれたもの。本画が今も遺る。

110 1790年

土佐光貞《清涼殿名所図》

寛政度内裏造営は一部を裏松固禅の研究に従う平安朝復古造営とした。本来天皇の居所である清涼殿は中でも重視された建物。土佐家から光貞、光時、光孚が障壁画の制作にあたり、本文唐絵と大和絵和歌名所図を描く。和様の景物で飾るのは私的空間である。

111 1790年

土佐光貞《昆明池図》

寛政度内裏造営では、復古的な意匠を模索するため、土佐家が早い時点から関わった。屏風や障子などの調度も復古様式で調製され、清涼殿弘廂の衝立障子である昆明池障子は、伴大納言絵巻などを参考に復元。手長足長を描く荒海障子とともに古制を伝える。

112 1855年

土佐光清《四季花鳥図》

安政度内裏造営は焼失した寛政度内裏に準じて行われた。土佐家は寛政度と同様に障壁画調度制作を担当。清涼殿の他、常御殿などの襖を光清、光文、光武が描いた。この図は常御殿剣璽の間の小下絵で、監修者の押紙に「幹は細く花は八重桜」と指示が付される。

113 室町～江戸時代

土佐家《花卉画帖》

写生は土佐家においても重視された。これは光起の時代に編集された花卉写生粉本集。69葉からなる。光吉は師の光茂から粉本文書を託されたといわれるが、図は1548年の牡丹図模写。粉本として写生も模写も等価である。

114 室町～江戸時代

土佐家《鳥虫画帖　鳥》

花に比べ、鳥の写生には困難が多い。生態観察に加え死んだ鳥も必要である。そのため他人の写生や優れた本画も極めて貴重な粉本となった。花卉画帖とともに制作された鳥や虫の写生粉本集。図には構造や色彩が注記される。

115 室町～江戸時代

土佐家《鳥虫画帖　虫》

虫は最も身近な動物。それだけに古くから写生の対象となった。土佐家の粉本帖には小動物の写生も多数見られる。描いたものを切り抜き大切に貼り込んでいるのは16世紀の写生。1683年の紋黄蝶の粉本が真新しく見える。

116 桃山～江戸時代

土佐家《道具画帖》

土佐家の粉本帖をみれば制作資料として楽器、甲冑、武具、馬具、装束の詳細も描く。専門的な名所を記した備忘録も貼り込まれるのは、故実が教養の一部となっていたことを教える。図は1661年の矢羽根模様図。すでに絵所預に復帰した光起の手であろう。

117 1773年

狩野洞春《探幽筆唐美人図》

洞春や洞白ら狩野家の絵師が、狩野孝信の子探幽、常信、尚信らの手になる唐美人図を集写した模本図巻。洞春は探幽の義子洞雲の開いた駿河台狩野家の四代。五代洞白はその子。代々朝鮮御用屏風の制作にあたる家である。

118 1878年

藤原貞幹《集古図天文》

貞幹は江戸時代後期の国学者。文献のみならず多くの古物を調査収集し、出土遺物も示して、日本の考古学の黎明期を支えた。彼の研究の集大成とされるのがこの「集古図」。本写本は貞幹の手元にあった広本とされる。図は陰陽寮日月図。中世の天体図という。

119 江戸後期

横山華山《祇園祭礼図》

岸竹堂に学び、四条派円山派を折衷した華山の手になる京都祇園祭の写生図粉本。文化から天保期の様子を描き、前祭の巡行を再現する。本画も現存するが、山鉾の飾りに対する興味のみならず、周辺人物の姿態も細やかに記録する素描の妙がある。榊原家旧蔵。

120 1859年

太秦牛祭写真

牛祭は太秦広隆寺で行われる大酒神社の祭礼。明治維新期に中断したが、富岡鉄斎の尽力もあり1887年に復興した。これは文書写生12紙を継いで巻子としたもの。近世の牛祭の詳細な記録として貴重。望月家の旧蔵品で、資料として牛祭図草稿と一括される。

121 明治時代

望月玉溪《舞妓図》

望月派は江戸中期の玉蟾を始祖として近代に至るまで継続した日本絵画の流派。３代玉川の時代に資清館という画塾を開き、多くの弟子で賑わった。４代玉泉の時代まで続いたといい、これは若き日の５代玉溪による画塾の蔵本。

122 1889年頃

望月玉溪《大沢秋景図》

「平安百景」は望月玉泉が３年をかけて京都の真景百所を描いた企画作品。明治中期の京都の姿を伝える。２幅ずつ50名に頒布したが、分散しており、画題のほかは明確ではない。子の玉溪をはじめ弟子達の写しがこれを伝える。

123 明治時代

鈴木百年《縮図帳》

鈴木派の祖である百年は画学校最初の教員のひとり。穏健な画風で諸派をよく折衷した。その縮図を見れば様々な画題と形態に対応する準備が行き届き、依頼への柔軟さがうかがえる。印は「三万六千日」と、百年をしゃれている。

124 1900年

猪飼嘯谷《八幡神像写生》

歴史故実に通じた嘯谷が行った写生や模写は膨大である。青年期の写生帳には、花卉景物の他、さまざまな風俗や文化財が写される。写生帖「奈良の落葉」から帝国奈良博物館での写生。薬師寺鎮守休ケ丘八幡神として有名なもの。

125 1922年頃

千種掃雲《写生帖　八丈島》

竹内栖鳳に日本画を学んだ掃雲は、後に浅井忠にも師事し洋画を学ぶ。1906年に丙午画会を結成。洋画の表現を取り入れて日本画の革新に挑んだのである。八丈島で描く写生には毛筆の緻密な表現に光と影が織り込まれる。それは師栖鳳の眼差しでもある。

126 1921年

伊藤柏台《樹》

京都生まれの柏台は絵画専門学校を卒業すると、当時青年画家に人気のあった国画創作協会展に出品し、会友に推挙された。ペンや筆を用いる風景画は線描に特徴を見せ、素描にも本画に劣らない力強さがある。30代で夭折した。

127 1931年

石崎光瑤《緋緘綬鶏》

光瑤ははじめ金沢で江戸琳派の山本光一に師事したが、後に京都の竹内栖鳳門下となり、写生画の系譜に連なる。その素描は華やかでありながら緻密で精彩がある。図はインドから舶載の途次、神戸港停泊中に死んだ珍鳥。まだ温もりが残るかのようである。

128 明治時代

石崎光瑤《虫類写生》

手に入れやすい虫や小動物は、初学者にとって格好の画題である。土佐派や円山派の写生にも研究の様子がうかがえるが、近世には博物学的な興味の対象ともなる。そこからやがて写生の精神に科学的な目が加わる。これは十代の光瑤の手になるもの。生硬だが緻密。

129 1918年

土田麦僊《湯女素描》

1918年、文展に対する不信から、麦僊が級友小野竹喬、村上華岳らと国画創作協会を結成したことはよく知られる。その第１回展に麦僊が出品したのが「湯女図」。４曲屏風に展開する桃山風のおおらかな造形と色彩計画が、掌大の画帳の上で検討される。

130 1857年

憲海《婆珊婆演底主夜神像》

憲海は戒律を護持した真言僧。幕末期に六角堂能満院に入り、図像聖教開版の工房を主宰した。弟子とともに収集制作した膨大な仏画粉本が奇跡的に遺る。図は華厳経に見える善財童子歴訪の善知識。下絵として修正を加える。

131 1853年

憲海《五部心観》

原本は園城寺所蔵の唐本白描図像。智証大師円珍の請来品として著名である。金剛界曼荼羅諸尊とその印契を描いたもので、憲海は天台寺院に伝わる写本によって書写した。再三の転写にも関わらず張りのある線描が美しい。

132 1855年

憲海《長谷寺十一面観音像》

憲海が修学した長谷寺の本尊十一面観音立像は10mを越す巨大な彫像。その指図と伝えられる原寸大の絵像が長谷寺に遺る。憲海は弟子皆了とともに16mを越す画像のほぼ全体を白描で書写した。その面貌部には彩色を施す。

133 1822年

憲海《天神七代像》

河内高貴寺に伝わる天神七代の図。正法律を唱えた飲光はまた独自の両部神道を唱え雲伝神道といった。その飲光所縁の図として、神祇思想を学ぶ憲海が写したもの。天神七代とは天地開闢から伊弉諾尊、伊弉冉尊に至る七代の神。

134 1825年

憲海《十種神宝図》

空海真筆の伝承がある武蔵国大悲願寺所蔵本からの写本を憲海が籠字により写したもの。憲海は両部神道を学ぶが、十種神宝図は飲光の雲伝神道において重要な役割を持たされる書物。憲海の生涯の研究課題である空海研究と神道研究が早くも交差している。

135 1853年

三社権現図

宝塔は伊勢の天照大神で、大日如来でもある。左右は八幡神と春日神。三社の神号や託宣を一軸に記す三社託宣は、中世以後吉田神道によって流布した。これを絵画的に表現したものだが構成が珍しい。憲海の師龍肝所縁の図像。

136 1849年

憲海《葛川護法尊像》

天台宗葛川明王院に伝わる護法尊像。高山寺僧護の依頼により、梅ケ畑村にある護法神祠本尊として描かれた。護法は仏法守護の神霊で、童子形が多い。祠堂には８年後、冷泉為恭の天神像と憲海の鬼子母神像も安置される。

137 1829年

憲海《孔雀明王像》

智積院が所蔵する鎌倉期の図を、長谷川等鶴が白描本として転写し、それを憲海が複模した。後に高山寺僧護の命により本画と彩色の校合を行ったため、現状は著彩される。この図から弟子大成が下絵を起こし原寸大版画が作られた。

138 1848年

憲海《勝敵毘沙門天像》

憲海が六角堂能満院に仏画と開版の工房を主宰したのは「印施千種」の大願を果たすため。図像聖教を収集し、版木に彫ること700～800種に及んだといわれる。本図は唐本図像を用いて版下を起こし、著彩した大型版画。

139 1869年

大成《龍猛像》

志摩の僧尊峰は、空海ゆかりの両部曼荼羅開版を発願し、憲海の弟子大成、宗立、雲道の力を得て完成した。いわゆる「御室版両部曼荼羅」である。尊峰と大成らはその後も多くの大型開版に協力した。本作は真言八祖像のひとつ。

140 1851年

大成《船玉明神像》

能満院は古い図像を収集し蓄えたが、一方で新図も開発した。担当したのは、憲海の弟子大成と宗立である。本図は古図像４点を組み合わせ、船玉神を中心に置く海上守護の御影とする。肉筆画のほか、大型版画にして施与した。

141 1911年

田村宗立《不顧像》

宗立は京都洋画の草分け。しかし、彼がはじめて本格的に学んだのは仏画である。能満院で憲海に学ぶ傍ら、洋画が示す視覚の脅威に魅せられ、独学で洋画研究を始める。明治になり憲海の白描に宗立が新たな素描を付した肖像。

142 1853年

憲海《請雨経敷曼荼羅図》

憲海は優れた阿闍梨として知られ祈雨法に効験があったという。請雨法は空海所縁の修法とされ、高山寺で僧護に学んだ痕跡がある。弟子宗立の素描に、下鴨村において憲海が行った祈雨の謝礼として受けた西瓜と南瓜の図がある。

3

京の美術館

教育の場である学校に美術品が収蔵される契機となったのは、明治20年、摂理を退いた田能村直入が、自身のコレクションを学校に寄付したことにはじまる。その後、参考品として日本や東洋の古美術品が購入されたが、教員が自身の作品を寄付する例は少なかった。変化を見せるのは昭和37年東山今熊野の校地に陳列館が建てられてからである。展示室と収蔵庫からなるこの施設の存在は、学校の卒業生や教員に作品寄付を促すようになった。美術品が蓄えられるにつれ、陳列館は京都の美術家を中心とする小さな美術館として機能するようになり、今日の芸術資料館につながっている。

143　中国　1607年

王中立《歳寒二雅図》

元摂理の田能村直入から画学校に中国画や文房具が寄付されたのは1887年のこと。教材以外の収蔵品はこれが第１号となる。最も古い年紀を持つのが本作。中国・蘇州に生まれた中立は呉派のひとり。花鳥画を得意とした。

144　中国　1703年

宗言《渓山深遠図》

田能村直入の寄付品は、唐櫃に収められていた。学校に生まれた小さな美術館の始まりはひとつの唐櫃である。本作も直入の旧蔵。宗言は山響と号し、金陵八家に代表される個性的な画家を輩出した南京に生まれ、山水をよくした。

145　中国　1786年

汪葑《渓山明微図》

田能村直入寄付画の中一番の大幅。美術工芸学校の嘱託教員富岡鉄斎が、丁寧に模写した図が遺る。汪葑は中国・蘇州の人。芥亭と号す。文人画の流れを受け、山水をよくした。その作品は古画の気風を伝えて重厚である。

146　中国　1794年

張洽《江山無尽図巻》

江山無尽は水平方向に広がる山水図の称。田能村直入の寄付画のひとつ。張洽は中国・蘇州に生まれ、月川と号した。画を叔父の画院画家張宗蒼に学ぶ。山水を善くしたが、禅に深く傾倒し、晩年は南京の仏堂に隠棲する。直入は月川の作を好み複数所蔵した。

147　中国　1877年

王燾《米法山水図》

田能村直入の学画は古画模写によって培われた。しかし本作は直入と同世代の中国画家の作品、いわば現代作家ものである。米法は北宋の画家米芾の始めた山水の描法。南画の生きた教材となった。海寧の人王燾は雲谷と号した。

148　中国明時代

漁夫図

美術工芸学校は1894年から国の補助金を受ける。向こう５年の約束は、結局昭和初期まで続く。これを使って古美術が購入されるようになり、収蔵品は拡大を始める。本作もそのひとつ。田能村直入旧蔵品に手薄な明代浙派に連なる職業画家の作を求めた。

149　中国明時代

花鳥図

東洋画の収集が再度活発になるのは昭和戦前期である。日本と大陸間の往来は活発となり、画家が中国に行くことも増す。明代浙派の大幅が購入されるのはこの時期。太湖石と梅樹を中心に置く重厚な構成は工房作ながら力強い。

150　中国明時代

伝 仇英《採蓮図》

仇英は中国・蘇州で活躍した呉派の画家。職業画家ながら文人とも親しく、仕女画に巧であった。鮮やかな彩色と写実を基調とする細密な描写が特徴とされ、本作はこの仇英様式で描かれた工房作。可憐な画面は青年画家に愛され、麻田辨自による模写が遺る。

151　朝鮮　1561年

薬師曼荼羅図

李氏朝鮮中宗の王妃である文定王后によって奉納された金泥描の薬師浄土図。文定王后は子の明宗時代多数の仏画を制作。本図の銘文に金泥描と著彩の７幅を制作したとある。共に制作された金泥描本が高野山円通寺に伝来する。

152　朝鮮　1562年

五方五帝図

五つの方位を守る天帝の図。道教神図だが、仏僧が描き供養する。施主は中国洛陽の人ながら李氏朝鮮の制作と思われる。五帝は、東方青帝、南方赤帝、中央黄帝、西方白帝、北方黒帝の五神。五行に従い方位の色の道服をまとう。

153　チベット　19世紀

ヤマーンタカ

ヤマーンタカはチベット密教の大威徳明王。悟りの直前に盗賊に殺され牛頭の悪鬼となった僧を調伏するため、文殊菩薩が九面三十四臂十六足に変化した姿とされ、明妃を抱く。原型をとどめないほど使い込まれたタンカの残欠。

154　インド　19世紀

武人と会見する貴婦人

戦前期の収集では、中国以外のアジア絵画が視野に入る。本作はラージプート絵画と呼ばれるインドのヒンドゥー教系絵画で、西ヒマラヤ丘陵地帯のシーク派のもの。大正期には印度細密画が紹介される機会が増したが、未だ実物を見ることは貴重であった。

155　タイ　18世紀

ラーマキエン図

古代インドの叙事詩ラーマーヤナはタイに伝わるとラーマキエンとなる。主人公はインドと同じラーマ王子。さらわれた王妃の救出に助力するのが、風神の子の猿神ハヌマーン。孫悟空のルーツのひとつ。寺院を装飾する絵画。

156　タイ　20世紀

釈迦如来二比丘図

タイのバンコク期に作られた幡。上部は釈迦と弟子の舎利弗、目犍連。下部は三道宝階降下と呼ばれる説話で、釈迦が天上での説法を終え、下界に降りてくるところ。天への階段は金、玻璃、銀でできている。民画風の親しみがある。

157　中国唐時代

加彩婦女俑

陶俑は中国で死者に副葬される陶製人形。絵画専門学校での収集は1925年から。加彩は素焼きに顔料で装飾したもの。粘土による細かな造形ができるため盛行した。本作はふくよかな唐美人。上着の表現が細やかである。

158　中国唐時代

三彩武人俑

陶俑には施釉されるものも多い。その代表が三彩。緑、褐、藍などの色彩が鉛釉の光沢に映える。三彩が注目されるようになったのは19世紀の末頃。さほど古いことではない。本作は武人の像で頭部は加彩。これも1925年の収集品。

159　中国六朝時代

加彩男子俑

日本画家堂本印象が1928年に絵画専門学校へ寄付した陶俑40点のひとつ。印象は研究科生の時期に度々中国を訪れ、陶俑を収集した。目を見開き、下唇をかみしめる怒りの表情が珍しい。動きを感じる力強い造形である。

160　中国後漢時代

灰陶豚小屋

明器とは日用の器物を木や陶器で模造し、死者とともに墓に納めたもの。当時の生活を今に伝える。家畜は人の生活と切り離せないものとして、よく作られた。豚小屋の上階は便所、傍らに犬がいる。堂本印象寄付品のひとつ。

161　鎌倉時代

如意輪観音像

如意輪観音は如意宝珠の力によって福徳をもたらし、法輪の力で煩悩を打ち砕くという変化観音。六道を救済するため中世に信仰が拡大した。燻されて見にくいが、天蓋の下、花咲く補陀落山に坐す。細かな截金が残る。明治の購入。

162　鎌倉時代

当麻曼荼羅図

阿弥陀如来の極楽浄土を描く浄土変相図のひとつ。観無量寿経の世界を中国僧善導の解説に従って図示したもの。奈良当麻寺の蓮糸曼荼羅が源流だが、本図はその９分の１の大きさ。小ぶりながら相応の密度がある。明治の購入。

163　室町時代

白衣観音図

禅家の白衣観音は儀軌を拠り所としない。白衣は菩提心の清らかさ、あるいは在家信者の象徴ともいう。原型は唐で生まれた水月観音とされるが、岩に寄りかかりくつろぐ姿は明兆以来東福寺系の画僧がよく描いた。明治の購入。

164　桃山時代

天神図

天神すなわち天満大自在天神は、菅原道真の御霊を神格化した神。衣冠束帯姿に描かれるのが典型だが、目を見開き、前歯をむき出す怒りの表情を見せるのが古様。飛梅と一夜松の伝説により松と梅は天神の象徴となる。明治の購入。

165　江戸前期

狩野興以《墨画扇面》

枯蓮に燕をあしらう草体の墨画。扇面は中世の元信以来狩野派の得意とするところ。糊地に金泥を引く上品な実用品である。散らし書きは『夫木和歌抄』から奥羽国境有耶無耶の関の歌を採る。興以は狩野光信の弟子で、探幽、尚信、安信の後見人を務めた重鎮。

166　江戸前期

洛外名所絵巻

京都とその周辺の景観を描く洛中洛外図は戦国時代に生まれた。点景人物に関心が向けられるようになると、これが近世風俗画の源流となる。一方中世以来の物語絵巻の伝統に連なると、愛すべき玩具のような調度品ともなる。絵屋と呼ばれる町絵師の工房作。

167 江戸前期

立美人図

寛文美人図と呼ばれる風俗画。褄とる姿はその典型である。描かれているのは遊女。歌は遊女の手になる。いってみれば客への私信だから絵には落款など絵師の名は記されない。白に統一された手描き白描模様の衣装がしゃれている。

168 江戸後期

文書く女と侍童図

西川祐信風の遊女図。炬燵に腰掛けて客への文を書くところ。墨を摺る侍童との大きさの対比が著しく、古画を見るよう。上方では寛文美人図の影響が根強く残り、無款の美人図が長く作られる。二人の着物の柄が入念である。

169 江戸後期

祇園井特《遊女宮城野図》

独特の女性風俗を描く井特は、祇園の遊女屋の主。歌舞伎の「碁太平記白石噺」から宮城野を演ずる女形を大首絵で描く。井特は素人絵師だが、職業柄人を観察する力は尋常ではない。大正期の学生達もこの図から多くを学んだ。

170 江戸前期

藤娘

大津絵は江戸時代に近江国追分周辺で土産物として売られた民俗絵画。庶民の信仰を背景とする仏画に始まり、やがて風俗画に展開した。風俗美人画に通じる艶めかしさのある本作は初期のもの。藤娘は後に歌舞伎舞踊となる。

171 江戸後期

傘さす女

大津絵の魅力は量産のための簡略な線描と単純な色彩にある。近代になると衰退するが、明治末に富岡鉄斎ら、昭和初期に柳宗悦らが光をあてる。学校周辺にも研究する者は多かった。本画題も古くからあり、民画らしさを見せる。

172 1691年

土佐光祐《建保中殿御会図》

1218年に行われた内裏清涼殿の宴を描く家蔵の粉本から、17歳の光祐が無位無官のまま著彩本として描いた。この年祖父光起が亡くなっており、父光成に代わり、光祐が絵所の仕事としてデビューを飾る。土佐光信以来似絵を得意とする流派の面目を施した。

173 江戸後期

冷泉為恭《童舞図》

為恭は幕末の復古大和絵派のひとり。王朝文化に憧れ、古画を模写して制作の源泉とする。本作も北野天満宮所蔵の舞楽図から一部を切り取り作品に変えた。本来は異形の仮面を付ける蘭陵王だが、童舞では天冠に菊の挿頭という姿となる。右は囀という舞人の詞。

174 1805年

谷文晁《群蝶図》

文晁は江戸南画を代表する絵師。狩野派に学びながら写生画、文人画を学んで武家の世界に軸足を置く。写実的な風景画で知られるが、対幅の蝶尽くしは異色。博物学的な写生を活かしながら、華やかさを失わない所が新鮮である。

175 1851年

鈴木百年《三国志演義図》

画学校の教員であった百年だが、京都の文化人名鑑『平安人物志』に名を連ね、安政度の内裏造営に参加するなど、近世絵師の顔がある。本作は20代の百年による六曲一双の屏風。自らを素人の長じたものと嘯くが、堅実な構成力が人気の根拠を裏付けている。

176 1866年

岸竹堂《橋立図巻》

天橋立といえば雪舟の鳥瞰図が有名。竹堂はこの細長い景勝地を、細長いままに4メートルの巻子に描いた。彼も安政度内裏造営に加わるなど近世絵師の顔がある。明治維新の混乱に不遇の時代を過ごし、12代西村惣左衛門に依頼され染織図案を描いたことが知られる。

177 1880年

田能村直入《山水図》

京都府画学校開校の年に描いた山水図。屈託がない。直入の画学校開設の陳情は師田能村竹田の遺志があった。彼らは南画を学ぶ目的を人格の陶冶とする。やがて画学校での理想の教育に挫折した直入は自宅に南宗画学校を開く。

178 1901年

浅井柳塘《山水十二図冊》

南画家柳塘は画学校南宗の画学校出仕。当時京都の文人画家の出身は様々で、摂理の田能村直入は豊後、副教員の谷口藹山は越中、長老の中西耕石は筑前という具合。柳塘は阿波の出ともいわれ、旅のうちに詩書画を愛した。

179 明治時代

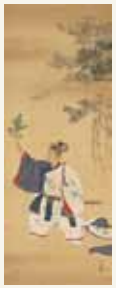
跡見玉枝《桜花禽鳥図》

江戸生まれの玉枝は桜の名手。師で従姉の跡見花蹊は京都で円山派に学び、玉枝もまた京都に来て四条派、望月派に学ぶ。つまり京都写生画の系譜にある。画学校の東宗すなわち写生画派教室の画学校出仕となった理由である。

180 1883年

鈴木松年《紅梅図》

画学校北宗の旧教員松年は1918年に亡くなる。翌年、表具師伏原利造から寄付されたのが本作。教員時代の健筆を伝える。揮毫当時、内国絵画共進会において京都の画家の多数が受賞。松年も含め画壇に高揚する気分があった。



181 明治時代

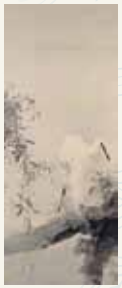
原在泉《神事》

原在中を祖とする原派の４代として在照の養嗣子となったのが在泉。画学校東宗の画学校出仕となり、学校改組後の教諭をつとめた。有職故実に詳しく、禁裏の御用も多かった。1912年に「明治天皇御大喪絵巻」を制作。

182 1901年

豊島停雲
《名和長年伏奏闕下図》

停雲は新潟村上の人。美術工芸学校を卒業する。はじめ官展に出品するが、実業家野村得七の知遇を得ると、次第に画壇を離れた。野村別邸碧雲荘大書院の障壁画を描く。本作は歴史人物を描き評価を得た頃の画。写生を重んじた。



183 1911年

菊池芳文《柳鷺図》

芳文は大阪の人。幸野楳嶺門下では四天王の一人。美術工芸学校、絵画専門学校の教員を務め、その巨躯は印象的。本作は作者の寄付品、墨画の小品とはいえ、現職教員が絵手本以外に作品を寄付する例は当時極めて珍しかった。

184 1912年

絵専美工両校校友会揮毫画巻

絵画専門学校と美術工芸学校両校の校友会は、作品展開催や会誌『美』の刊行などの事業を行った。その経費を賄うために、会員から揮毫を募り、頒布する事業も行った。両校教員の揮毫18図を巻子にまとめた本作はその痕跡。図は菊池芳文の婿養子菊池契月の作。

185 明治～大正時代

神坂雪佳《観楓図》

岸光景に学び、琳派に四条派を加味した図案を遺した雪佳は、浅井忠とともに京都の図案界に潮流をなした。はじめ鈴木瑞彦に四条派の絵を学んでおり、絵画作品も少なくない。美術工芸学校に於いては絵画教育を重視した。

186 大正時代

猪飼嘯谷《佐伎母理》

谷口香嶠に師事した嘯谷。師風を継承し、歴史人物画に優れた。本作は防人を主題とするが、実は頼るべき手本がない。考古遺物たる古代の甲冑から、武人の姿を浪漫的に描いた幻想である。当時の歴史画の傾向が垣間見える。

187 大正時代

都路華香《神苑図》

華香が学校と関わるのは1910年絵画専門学校の嘱託講師着任以後。早くから建仁寺の竹田默雷に参禅したためか、画想に独自の感覚がある。神苑図とする本作は神社を描かず、鹿＝春日、鳩＝八幡として神使に象徴させる。

188 1913年

木島桜谷《鹿》

桜谷は鈴木派の今尾景年に師事。大正初期に衣笠に移り、この地が「絵描き村」となる先鞭をつけた。旧宅は画室とともに今も遺る。写生を基本とし、諸派を吸収して大画面を描いた。本作は学校教員が校友会事業で頒布のため競作した金地扇面画。８軸が遺る。

189 1916年

徳岡神泉《晩秋》

神泉は美術工芸学校入学以前に竹内栖鳳塾に入る。雅号は生家近くの神泉苑に因む。本作は絵画専門学校在学中、２曲屏風として描かれた。的確な筆墨の写生表現と落葉を金箔押しとする装飾性の組み合わせが、研究意欲を見せる。

190 1919年

川村曼舟《蜑邨暮靄》

元絵画専門学校校長曼舟は山元春挙に師事。師没後は画塾早苗会の指導にあたる。本作は第１回帝展に「海－日出後・日没前」として出品した作品のうち「日没前」を改題したもの。光を主題とするところは師の画想を継承する。

191 1928年

榊原苔山《早春》

染色家榊原芦江の四男。九男のうち苔山をはじめ長男雨村、次男紫峰、六男始更、末弟弘の５人が美術工芸学校、絵画専門学校を卒業、画家の道に進む。戦前期の苔山は官展に活躍。本作は帝展出品の４曲屏風。竹内栖鳳門下らしい堅実な写生が凜とした空気を描く。

192 1935年頃

望月玉成《花鳥図》

京都の画系である望月家は江戸中期の玉蟾にはじまる。本作は６代玉成による花鳥画の大幅。父玉溪ゆずりの写生に基づく穏健な画風をみせる。玉成は絵画専門学校卒。当代となるその子玉船は美術大学で漆工の道に進んだ。

193 1947年

濱田観《芥子》

観は兵庫姫路生まれ。はじめ大阪で図案の仕事をするが、やがて京都に移り、竹内栖鳳門下となる。絵画専門学校の卒業は38歳であった。在学中に帝展に入選。本作で第３回日展の特選を受ける。透明感のある色彩から戦後の制作がはじまる。観は好んで芥子を描く。

194 1947年

三輪晁勢《有明》

晁勢は絵画専門学校卒業後、堂本印象の画塾東丘社に入る。画塾は近代に隆盛を見る絵画の研究組織で、師の没後同塾は晁勢が主宰.現在も後進に継承される。本作は日展への復帰作として出品された。有明は復興への祈りであろう。

195 1959年

猪原大華《篁》

大華ははじめ土田麦僊に師事、師の没後は西村五雲塾晨鳥社に入る。京都写生画の正統を受け継ぐ大華だが、絵の主役を「画面の裏側に置いておきたい」と語る。本作では焼群青の深い色合いの奥に自然と造形の調和を試みる。

196 1963年

山口華楊《樹》

華楊は西村五雲の門下。絵画専門学校を卒業し、後に教員を務めた。師の没後解散した画塾晨鳥社を再結成している。本作は青蓮院の楠を描く。華楊は若い頃知恩院山内に暮らしたことがあり、散策の途次に見る樹に魅せられたという。

197 1969年

秋野不矩《雨期》

不矩は静岡天龍の生まれ。西山翠章塾青甲社に入る。はじめ官展に出品するが1948年新しい日本画を模索し有志と「創造美術」を結成した。後の創画会である。本作は度々訪れたインドを描く。抽象画のような景観表現に、綿布地を用いる工夫がある。

198 1920年

村上華岳《裸婦　画稿》

山種美術館が所蔵し近年重要文化財になった「裸婦」の画稿。本画は華岳が参加した国画創作協会の第３回展に出品された。そこに描こうとしたのは「久遠の女性」と語られ、菩薩像や西洋古典絵画の女性像の影響がうかがえる。

199 1918年

中村大三郎《懺悔　画稿》

大三郎は絵画専門学校を卒業、教員も務めた。西山翠嶂門下で、後にその女婿となる。本作は在学中、文展に初入選した作品の画稿。本画は現在確認できない。はじめ歴史風俗を画題とするが、やがて現代女性を描いて注目された。

200 1885年頃

田中九衛《紡績工場図》

九衛は備前の人、画学校西宗に入学し、同宗の卒業生第３号となる。郷里岡山に帰り、後進を育てた。寺松国太郎の師として知られ、肖像画をよくしたという。本作は画学校時代に制作した木炭画。複製画からの模写だろう。西宗の生徒作品として遺る唯一のもの。

201 明治後期

伊藤快彦《能道具図》

快彦は京都若王子神社に生まれた。田村宗立に師事し画学校に入学する。東京で原田直次郎らに学んだ後、京都に戻り、関西美術院創設に関わる。京都洋画の黎明期を支えた。本作は板に油彩で描き扁額装される。当時こうした日本趣味の洋画は少なくなかった。

202 1905年

浅井忠《琵琶湖風景》

江戸生まれの忠は工部美術学校で本格的に洋画を学び、フランス留学後、京都に移り京都高等工芸学校で後進を指導した。本作は京都市立美術大学の学長を務めた動物学者川村多実二の旧蔵品。彼は忠の開く聖護院美術研究所で洋画を学ぶ弟子でもあった。

203 1913年

池田遙邨《晩秋の山》

岡山倉敷生まれの遙邨は竹内栖鳳の門下。絵画専門学校を卒業し、後に同校教員を務め、戦後は画塾青塔社を主宰する。日本画家遙邨の出発点は大阪で松原三五郎に学ぶ洋画。18歳の時、水彩画が文展に入選し早熟の才を示す。本作は風景を印象派風に描く。

204 1914年

村山槐多《信州風景》

槐多は洋画家にして詩人。22歳で夭折した。従兄は洋画家の山本鼎。本格的な制作活動は東京で開始するが、多感な小中学校期を京都に過ごした。18歳で上京の途次長野大屋で描いた本作は、府立第一中学時代の後輩で、後に評論家となる林達夫に贈られたという。

205 1940年

黒田重太郎《暮秋好處》

重太郎は鹿子木孟郎、浅井忠に洋画を学ぶ。２度の渡仏で美術史も学び、著述は多い。美術専門学校にはじまる本学洋画教育の要である。本作は1962年今熊野校舎の陳列館竣工に先立ち、彼の支援者福井治兵衛から寄付された。

206 1953年

須田国太郎《走鳥》

国太郎は京都帝国大学で美学美術史を学び、関西美術院で洋画を学ぶ。美術専門学校の教員となり黒田重太郎とともに大学昇格に尽力した。本作は作者から退任記念として寄付され、学校における近代美術収集の先鞭となった。

207 1945年

太田喜二郎《山城平野の夕日》

喜二郎は東京美術学校で黒田清輝に学び、ベルギーに留学してエミール・クラウスに師事。1917年いち早く新印象派を伝えた。美術工芸学校図案科教員となり、学校に洋画教育が再開する。本作は戦後第１回京展の出品作。

208 1958年

川端彌之助《疏水》

彌之助は関西美術院で澤部清五郎に師事して洋画を学び、渡仏してシャルル・ゲランに学ぶ。帰国後は春陽会展に出品、堅実な画面構成と明るい色彩の風景画を描いた。1925年建築のアトリエは現在も当時の姿を遺す。黒田重太郎らと共に大学昇格に尽力した。

209 1895年

大村西崖《大獅子》

静岡生まれの西崖は東京美術学校彫刻科の第1期生。高村光雲らに学ぶ。卒業後京都市美術学校の教員となり彫刻科設置に尽力。本作は同校教員時代に制作した木彫で、美術評論家、美術史家に転じる前の数少ない作品のひとつ。

210 昭和初期

石本暁曠《第一歩》

暁曠は島根の人。名は暁海。美術工芸学校彫刻科を卒業、後に同校教員となる。師は同郷の米原雲海。北野天満宮や八坂神社の巨大な銅造獅子狛犬像は暁曠が原型を制作したもの。実は京都の人が必ず目にする彫刻の作者である。

211 1940年

北村西望《幸野楳嶺胸像》

学校創立60周年を記念して、有志により楳嶺胸像が設置された。教員の西望が原型を制作、卒業生建畠大夢が鋳造するが、２年後に供出され、残るは石膏像のみ。西望は長崎の生まれ。美術工芸学校ののち東京美術学校を卒業。

212 1965年

辻晉堂
《目は口であり、口はまた目である》

晉堂は鳥取に生まれた。東京で彫刻を発表し、はじめ日本美術院の同人となる。戦後京都市立美術大学教員となり、陶彫に独自の世界を開拓した。早くから禅に関心を示し、20代で得度。本作の主題もまた禅精神が表れる。

213 1979年

山本恪二《フランスの男》

恪二は滋賀の人。東京美術学校を卒業し、京都市立美術大学教員を務めた。パリへの留学ではマルセル・ジモンに学ぶ。湯川記念館の湯川秀樹像ほか市内に多くの作品が遺る。後進の指導に尽力し、京都具象彫刻の裾野を広げた。

4

工芸に学ぶ

明治27年より実業教育のための補助金を国から受けるようになる。当初は学校予算の３分の１にあたる額で、この補助金により学校は様々な教育環境の整備が可能となった。そのひとつが工芸に関わる参考品の購入である。主に意匠教育に利用されたが、有職故実の研究資料として、歴史教育にも活用されている。戦後、外国の風土と美術の関わりが、関心を集めるようになると、大学から海外に美術調査に出かけることが重なり、収集した海外の工芸品を研究成果として収蔵した。時代や国を超えて収集された工芸品に学生は多くの刺激を受けた。

214 江戸前期

色絵橋人物図鉢(古九谷)

1894年からの補助金では工芸品も購入。学校にはすでに工芸図案科が設けられていたから、ひろく意匠を学ぶためのものである。この古九谷様式の大平鉢は比較的早い時期に購入された。中央の図は『八種画譜』から採られる。

215 江戸前期

黄瀬戸芦文茶碗

収集された工芸品は教材として用いられた。工芸諸分野にわたり、産地や技法を基準としてサンプル的に集めている。この黄瀬戸は向付を茶碗に改めたもの。へら描きのわずかな凹みに芦の意匠を見せる。美濃焼から撰ばれた1点。

216 江戸前期

色絵松竹梅文四方皿

「御菩薩」印のある本作は、呉須で若松を描き、これに青、緑の釉と金で梅竹を加える。いわゆる古清水手の色絵陶器。御菩薩焼は洛北深泥池北側で焼かれた初期京焼の窯場のひとつ。生産期間は短く、窯はやがて上賀茂に移転する。

217 江戸中期

色絵七宝透文手焙

古清水というのは初期京焼の色絵陶器を総称したもの。本作は青と緑の釉に金彩が加わる典型的な古清水手。木瓜型の胴に透かし彫りの七宝つなぎ紋が施され、竹節を模した耳と脚の装飾が付されるなど風雅な意匠に優れる。

218 江戸前期

野々村仁清《瀬戸釉筒水指》

仁清は丹波国、現在の美山町の生まれという。瀬戸で修行し、京都御室仁和寺門前に窯を築いた。作陶は茶器類が多く、金森宗和好みの華やかな色絵で知られる。本作は鉄釉で古瀬戸風を写したもの。菊耳を加えて風趣を添える。

219 江戸中期

尾形乾山《色絵槍梅文水指》

乾山は呉服商雁金屋の三男。尾形光琳の弟。野々村仁清に師事し作陶の道に入る。はじめ鳴滝に窯を築くが、本作は二条丁字屋町時代のもの。得意の槍梅模様に霞を加えて全面に施す。学校が最初に購入した陶磁器のひとつ。

220 江戸後期

浅井周斎《交趾写鳳凰文菓子器》

周斎は大坂で鉄の商いにより冨を築いた豪商河崎屋源兵衛。晩年に男山に隠棲し作陶に明け暮れた。このとき八幡南山に築いた窯が南山焼の起こり。写しに巧みで本作は無印ながら周斎の作として伝わる。周斎の没後窯は廃れた。

221 江戸後期

青木木米《銹絵雲鶴文急須》

祇園に生まれた木米が、中国・清人朱笠亭の著『陶説』により作陶にめざめたのは29歳の時。奥田穎川に師事し、中国陶磁の写しや、煎茶器の制作を行う。本作は薄づくりで意外なほど軽く、書画も巧みな木米らしく運筆が冴える。

222 1833年

高橋道八(二代)《銹絵暦文茶碗》

粟田口生まれの二代道八は仁阿弥道八とも呼ばれる。唐物のほか、楽や乾山の写しも作り、陶塑置物に精彩がある。本作は1833年の大小暦を胴部に銹絵で記す茶碗。摺暦でなじみある三鏡宝珠を効果的に描く。道八はしばしば暦文茶碗を作る。

223 江戸後期

高橋道八(三代)
《飴釉金彩葡萄葉形鉢》

二代道八の長男。父とともに五條坂の窯で作陶する。父譲りの多才ぶりで、家業を発展させた。煎茶器を得意とするが、陶塑においては写実を進める。葡萄葉を器に見立てる造形は複雑で彫刻的でもある。学校が最初に購入した陶磁器のひとつ。

224 江戸～明治時代

角倉一方堂《加彩猿置物》

一方堂は名を玄寧といい、豪商角倉了以の末裔。嵯峨の角倉別邸に窯を築き、仁阿弥道八らを招いた。一方堂焼には道八による作品のほか玄寧自身の作陶もあり、本作ではぎごちなさの中にも道八ゆずりの諧謔味をうかがわせる。

225 江戸後期

永楽保全《染付雲堂文火入》

永楽家は室町期の初代にはじまる土風炉師の家。江戸後期から永楽姓を名乗るようになる。保全はその11代。雲堂手というのは雲と楼閣の文様を持つ青花磁器のこと。本作はその写し。紀州徳川家から拝領の「河濱支流」印がある。

226 江戸中期

楽宗入《黒楽茶碗》

1897年に楽茶碗９点を購入する。楽家は桃山時代の長次郎に創始し、現在も続く茶碗師の家。黒楽を５点、赤楽を４点。伝長次郎を含め、５代宗入から10代旦入までをサンプル的に収集し、資料の収集方針がよくわかる。

227 明治時代

伊東陶山《金地鶴図色絵角皿》

京焼のひとつ粟田焼には古い歴史がある。粟田口に生まれた陶山は、陶器の改良に尽力した。本作は琳派風の意匠を近代的に活かす。京都市工業試験場の旧蔵品で、収集した陶磁器の一部が1965年に美術大学に移管された。

228 1939年

清水六兵衛（六代）《向日葵花瓶》

清水六兵衛家は江戸中期にはじまる清水焼の家。六兵衛の名は世襲され、代々進取に富む作陶を見せる。本作は38歳の六代六兵衛が新文展に出品したもの。生来の絵画的素養を活かした大胆な意匠によって作風の転機を示した。

229 1926年

富本憲吉《染付陶板　曲る道》

憲吉は東京美術学校卒業後渡英し、バーナード・リーチとの親交のうち陶芸の道に進む。戦後京都に移り色絵金銀彩を大成、美術大学教員も務めた。本作は郷里の奈良安堵村に窯を築いていた時代のもの。身近な風景を呉須で描く。

230 1983年

近藤悠三《布士の歌染付皿》

清水寺門前生まれの悠三は陶芸の道に進み、富本憲吉らに学ぶ。その作品の魅力に、美しい呉須の色と力強い筆さばきがある。万葉集から高橋虫麻呂の歌「富士の嶺を高み畏み天雲もい行きはばかりたなびくものを」を染め付ける。

231 1963年

八木一夫《壁体》

陶芸家八木一艸を父に東山馬町に生まれた一夫。美術工芸学校彫刻科卒業の後、陶器の道に入る。朝鮮などの茶陶を研究するが、1948年鈴木治らと走泥社を結成。オブジェ焼という陶磁のジャンルが生まれる。伝統の上に前衛を積み重ねた。

232 中国後漢時代

灰陶博山炉

博山炉は、中国・漢代に盛んに作られた香炉。海中に屹立する仙人の山を象った。青銅や陶器で作られ、盤の上に有脚の火袋が立つ。本作は陶製。蓋は尖った山岳状をなし、側面に開けられた穴から立ち上る煙を雲霞に擬える趣向。

233 中国後漢時代

緑釉博山形酒尊

神仙の住む博山の意匠は酒尊と呼ぶ酒器にも用いられた。本来は青銅器だが、本作のような緑釉陶器は明器として墳墓に副葬される。多くは青銅器を模した造形を見せ、蓋に五岳を表し、熊足で支え、側面に獣鐶状の装飾がある。

234 中国明時代

白地鉄絵詩文文壺

磁州窯は河北省磁県の民窯。宋、元代に最盛期を迎え、日用雑器を中心に現在も生産が続く。白化粧した素地に鉄で文様を描いたものや、掻き落としの意匠が特徴的。本作は胴に詩書して文様とした。句は龐徳公の誡子詩から。

235 中国明時代

青花花鳥文稜花中皿

染付を中国では青花と呼ぶ。中国・元代に景徳鎮窯で発展した。本作は「五良大甫呉祥瑞造」の銘から祥瑞と呼ばれる青花。上質の素地に色鮮やかな呉須の絵付けが特徴。日本の茶人の注文により景徳鎮民窯で焼かれた輸入品と考えられている。

236 朝鮮李朝時代

魚文染付大壷

中国の青花が朝鮮半島に伝わると、その技法が研究され、独自の様式を生む。この壺は自立できない不良品で、本来廃棄されるはずのもの。大きさもあり、魚を大胆に描く絵付けの雅味が惜しまれたのであろう。戦前期に入手した。

237 鎌倉時代

三面宝珠紋裂

この裂は補助金による購入開始の年に入手した。仁和寺にある重要文化財「三面宝珠羯磨文様錦横被」と共布とされるが、断片であり、紅色を中心に退色も見られる。宇多法皇所縁の古裂が明治期に市場に流出したことがわかる。

238 桃山時代

黒地花文様縫箔裂

独特の意匠で慶長小袖と呼ばれる着物の断片。黒地の小袖全面を松皮菱形などで細かく区切り、絞りと刺繍と摺箔による細やかな模様で充填する。その総模様の様子から「地無し」と呼ばれる。小袖裂の収集は1896年にはじまる。

239 鎌倉時代

蓮華文綾幔裂

図案科教員谷口香嶠旧蔵品のひとつ。1913年に古裂類百点余りを香嶠より購入し、染織資料を充実させた。蓮華文が連続する意匠が印象的なこの裂は、源頼朝が東大寺に寄進した幔幕の断片と伝える。伝来の根拠はないが組織は中世に遡る。

240 桃山時代

松皮菱に桧垣桜花模様 辻ケ花摺箔裂

辻ケ花というのは、桃山時代に流行した縫い締め絞りを中心とする技法で作られた染織品。名の由来は不明。16世紀の作と見られるこの裂も谷口香嶠の旧蔵品である。収集裂はガラス板に挟まれ、特注の木製裂箪笥の抽斗に１枚ずつ収められた。

241 桃山時代

白地飛鶴御所車文様辻ケ花裂

谷口香嶠の旧蔵品。絞りと描絵によって文様を表し、辻ケ花の特徴をもつ。優れた意匠の小袖は衣服の機能を失っても古裂として愛好される。旧鐘紡織維美術館と田畑喜八が所蔵する古裂は、この裂とかつて同じ小袖をなした。

242 江戸前期

黒綸子地水に御簾文様 縁金箔鹿子小袖

松坂屋には戦前期に集められた多数の染織資料がある。その収集に深く関わったのが内山政雄。美術工芸学校の卒業生である。1980年内山から芸術大学に小袖と衣装裂が寄付された。本作は大胆な意匠が目を引く寛文小袖。

243 江戸中期

浅黄色縮緬地綿畑大文字散 文様小袖

明るい色彩の京友禅の小袖。衣装全体が模様に覆われる。これも内山政雄の寄付品。衣装図案を手本として集成したものを雛形と呼ぶ。内山は上野佐江子とともに雛形本の研究を行い、本学の図書館に研究成果を寄付している。

244 江戸後期

小忌衣

明治末頃から歴史故実の教育資料として公武の様々な装束が収集されるようになる。儀礼に関わるものが多く、小忌衣も神事に用いる上着。図は私小忌と呼ばれるもの。胡粉を引いた麻布に石清水八幡の山藍で模様を摺りつける。

245 1953年

稲垣稔次郎《三十三間堂内陣図屏風》

稔次郎は美術工芸学校を卒業。図案の世界に入るが、染色作品の発表をはじめるのは36歳と遅かった。富本憲吉の知遇を得て行動をともにし、小合友之助と学校の大学昇格に尽力する。型絵染による本作は、型による繰り返しが効果的な主題を選び和紙に染める。

246 1953年

小合友之助《雨》

友之助は図案科を卒業。都路華香に日本画を学ぶ。若き日に多数の古裂を模写した経験を持つ。蝋染に独自の世界を生み、後進に影響を与えた。宇治川を描く本作の抑制された色彩と抽象化を見せる簡潔な構成はその特徴を表す。

247 フランス　20世紀

ゴブラン織壁掛

神坂雪佳が1901年グラスゴー万博視察のため渡欧した際、持ち帰った資料のひとつ。フランスの画家リオネル・ペローの原画による綴れ織りのタピスリで、当時人気があった量産品。雪佳の収集はサンプル的で多岐にわたる。

248 江戸後期

更紗裂帖

更紗はインドの木綿地模様染め製品をはじめ、その影響を受けて諸国で製作された類似の染色品の総称。室町期には舶載され、近世初期までに渡来したものを古渡りと呼んだ。貴重な裂は画帖に貼り込まれ、収集の対象となった

249 インドネシア　20世紀

花鳥扇文更紗腰衣

1967年に佐和隆研を代表とするインドネシア美術調査隊が美術大学に組織された。染織工芸の調査も行われ、ジャワ更紗と呼ばれるバティックを収集する。これはジャカルタ製だが異国趣味が表れる。貿易の町らしく、様々な文化が混交する。

250　アフガニスタン　20世紀

銅製薬缶

1977年芸術大学に佐藤雅彦を隊長とするアフガニスタン伝統工芸調査隊が組織された。収集品は陶磁、ガラス、金工、染織、木工など91点。全て当時現用であった民族資料である。これは古い歴史を持つ町ガズニーで収集した。

251　桃山時代

菊桐紋蒔絵手桶

豊臣秀吉が用いた風呂道具のひとつ。類品は佐賀県立博物館などに遺る。胴に平蒔絵や絵梨地で大胆に菊桐紋を描く高台寺蒔絵。秀吉の菩提を弔う高台寺の建築装飾や調度の意匠を典型とする蒔絵である。漆工で最初の購入品。

252　桃山時代

挿秧人物蒔絵盆

香道具を載せる香盆。黒漆地に平蒔絵と螺鈿によって田植えの様子を描く。月次風俗図を見るような早乙女の群像が、風に揺らぐ水面を表す波線の重なりの中に浮かび上がる。図に古風なおおらかさがあるが、割れと剥落した螺鈿への杜撰な修理が惜しまれる。

253　1643年

黒赤漆高坏

後に大坂城代を務める幕臣稲垣重綱が石清水八幡宮に奉納した高坏13脚のひとつ。高坏は本来食膳として用いる什器だが、これは神饌を献ずるためのもの。ハレの具とされるのは方形で角高坏と呼び、丸高坏は略の具とされる。根来塗の一種である。

254　江戸中期

叭々鳥密陀絵盆

密陀絵は顔料を乾性油で練り、蜜陀僧と呼ばれる乾燥促進の薬剤を加えたもので描く油絵。ただ類似の技法との区別に困難があり、乾性油を用いた絵画全般を蜜陀絵と呼ぶことがある。本作は薄く溶いた顔料で絵画的に描かれる。

255　江戸中期

高士談棋草花密陀絵重箱

朱漆地に漆絵と密陀絵によって写実的な草花や囲碁に興ずる高士の姿を描いた重箱。色漆で表現できない白色は密陀絵の使用と考えられ、この種の漆器を城端蒔絵とすることが多いが、阿波の谷田蒔絵との関わりも視野に入る。

256　江戸前期

金森宗和《波蒔絵久和良形香合》

茶人金森宗和好みの香合として伝わる。久和良とは禅僧の袈裟の一種である掛絡のこと。誤解されて付属する象牙の輪をもさすようになった。外側は木地に直接黒漆を塗り木目を見せ、内側は銀地に銀蒔絵によって波文を表すという瀟洒な意匠。

257　中国明時代

果樹堆朱食篭

堆朱は彫漆の一種。別紅とも呼ぶ。朱漆を塗り重ねて厚い層をつくり彫刻を施すもの。中国・宋元代から発展し、黒漆を彫る堆黒や蕨形渦紋を彫る屈輪とともに明代に至る。本作は蓋に大きく太古石と果樹模様を表し、周囲を草花文で充填する。

258　1796年

面壁達磨鎌倉彫香合

鎌倉彫は、木地に薄肉彫した上に黒あるいは朱などの色漆を塗った漆工品。鎌倉時代に禅宗寺院の仏師が中国の彫漆を模倣して仏具調度を製作したのがはじまりという。本作は面壁する達磨を後ろから描いておおらかさがある。

259　江戸中期

永田友治《蟹蒔絵硯蓋》

永田友治は、江戸中期に活躍した京都の蒔絵師。焼錫粉を用いた高蒔絵で知られ、この技法を友治蒔絵と称することがある。硯蓋は食物を盛る器。光琳に私淑し、本作でも刷毛目塗りされた朱漆地に鉛と金で大胆に蟹をあしらう。

260　江戸後期

絵変蒔絵行厨

行厨とは携帯用の食事すなわち弁当のこと。重箱と酒瓶を組み合わせ、持ち手を付けるところから提重ともいう。これは金蒔絵の道具。八角重箱には梨地に四季花鳥文を蒔絵で描き、枠組側面に網目透文を用いて、意匠に凝る。

261　江戸後期

片輪車千鳥蒔絵酒温器

江戸中期の漆芸家小川破笠がはじめた鉛やガラス、陶片などを嵌め込む加飾を破笠細工という。本作は木地に摺漆を施し、蒔絵と破笠細工で上品に千鳥に片輪車の意匠を仕上げた酒温器。野外の行楽で酒を温めて飲むための器具。

262 江戸中期

塩見政誠《人物蒔絵印篭》

政誠は京都の蒔絵師。多彩な技法を用いた上品な蒔絵で知られる。特に研出蒔絵の名手として知られ、本作も技法の作例として求めたのであろう。耳かきする人物と大欠伸する人物を表裏に描き、政誠作品が見せる諧謔味に富む。

263 江戸中期

仙女唐子草花螺鈿食籠

黒漆地に細かな螺鈿装飾を施した六角食籠。琉球製と思われる。蓋に仙女図、各段の側面に窓枠に入れた唐子図と四季草花図を交互に描く。琉球王国には貝摺奉行所という漆工品の工房を兼ねた役所があり、献上品を製作した。

264 タイ　18世紀

蒟醤十角盛器

タイ・ミャンマーで作られる漆芸に蒟醤がある。同名の嗜好品が名の由来。漆の層に彫り刀で連続模様を刻み、朱漆などを充填して研ぎ出すもの。多くは籃胎すなわち竹を編んだ素地とする。日本でも茶人に愛され、後に讃岐象谷塗のような国産品も生まれる。

265 江戸後期

黒漆鼠短檠

短檠は丈の低い灯台。箱形の台を持つものは茶事に用いられる。鼠短檠は、火皿の油が減ると空気圧により支柱上部の鼠形の油壺の口から油が垂れ、給油する仕組みの灯火器。中国伝来の説もあるが、桃山時代には用いたという。

266 明治時代

漆塗手板

岸光景から寄付された漆塗りの手板。光景は東京の図案家だが、国策の図案改良に関わる官吏である。神坂雪佳の師として知られ、美術工芸学校の商議員を務めたこともある。蒔絵や変わり塗りの手板160枚からなり、漆工科の教材とされた。

267 1959年頃

平舘嘉邦《春馬蒔絵飾盆》

美術工芸学校での漆工教育は1895年にはじまる。実技制作をともない、湯浅久吉をはじめ歴代の教員により教育体制を整えていく。嘉邦はその教育を受け、後に学校の教員となる。京漆器の伝統を継承し、蒔絵に優れた。

268 江戸後期

左義長羽子板

左義長は小正月の火祭り。起源は宮中清凉殿で行われた陰陽師の儀礼である。左義長羽子板は、表に御殿内の貴顕の姿を、裏に左義長の様子を表し、極彩色と金箔で華麗に装飾する。公家では婚礼などの贈り物として用いられた。

269 江戸後期

源氏三十六歌仙歌かるた

歌かるたは公家の遊びであった貝覆いを原形とし、和歌を記した歌貝から生まれた。子女の教養を高める目的もあり、小倉百人一首のほか源氏物語や伊勢物語の和歌を主題として、絵を添えることが多い。1921年にかるた９種を購入。風俗研究の資料とした。

270 江戸後期

馬繪かるた

かるたの語源は南蛮人のカードゲーム。関係付けられた絵を組み合わせて遊ぶのが絵合わせかるた。教育的要素が強く、博物学的知識や社会的知識など絵図の対象は多岐にわたる。男子女子ともに用いたが、これは武家の男子向け。馬の毛色を細かく分類して描く。

271 江戸後期

波に鯛透彫鼈甲櫛

櫛は古くから使われた化粧道具。結髪に際しては髪飾りともなる。江戸中期以降、飾り櫛が意匠を競うようになると、鼈甲や象牙などの高価な素材が用いられ、蒔絵や螺鈿など華麗な加飾が行われた。図は透かし彫りの山高形鼈甲櫛。鼈甲は長崎に舶載された。

272 江戸後期

銀珊瑚入梅牡丹に桜びらびら簪

簪は髪挿しあるいは花挿しに由来するとされる髪飾り。江戸中期から発達し、耳掻簪をはじめ様々な種類がある。豪華なものは花簪から発展したびらびら簪。これら髪飾りの収集は、大正期の学校で女性風俗を研究した成果。

273 江戸後期

霊亀形煙硝筒

武家故実の資料として甲冑や武具も収集された。少し変わり種が1912年に25点を一括購入した硝煙筒。鉄砲の火薬入れである。発射のための玉薬入と導火薬を入れる口薬入の特異な形状への興味だろう。本作は霊亀を模した木彫の玉薬入。

274　江戸後期

扇象嵌鐙

故実の研究では、甲冑武具のみならず馬具も対象となる。足を乗せる鐙も幾つか遺るが、これは加賀象嵌によるもの。鉄銹地に緻密な銀の平象嵌によって大胆な意匠を見せる加賀鐙は加賀象嵌を代表する工芸品。鐙師という専門の工匠もいた。

275　江戸後期

茱萸袋

茱萸袋は重陽節に邪気を払うため飾る。由来は中国の習俗だが、端午節の薬玉とともに公家社会での節句儀礼として定着した。茱萸は木の実。白黄の菊とともに染絹布で作る伝統的な造花である。故実研究の資料として収集。

276　1688年

這子

這子は白い布製の人形。天児という人形とともに、幼子の災厄を避ける御守りとなった。その歴史は雛人形より古く、這う子のように見えるがその語源は祓い子とも言われる。いわばぬいぐるみの元祖。衣服のないものが多い。

277　江戸中期

次郎左衛門頭立雛

雛人形の形式として古いのが立雛。身は料紙に着彩、頭は江戸中期に三条寺町の雛屋次郎が作り始めた次郎左衛門様式。白玉にわずかに目鼻を点じたような顔が愛らしい。公家幕府の他、諸大名に愛好され、雛人形の本流とされた。

278　明治時代

相良人形　座美人

学校教育の中で写生は大きな役割を担った。収蔵品には写生のモチーフとして集められたものもある。郷土玩具はそのひとつ。木製、陶製さまざまだが、場所柄伏見の土人形が多い。これは山形の相良人形。玩具は趣味よく選択。

279　1925年

井浦狂阿弥《書院の武者》

吉川観方と江馬努の監修により大丸京都店が頒布した陶製風俗人形。25種類が制作された。京都で調製するが、博多人形の流れを汲む作家があたる。東京から京都に移った狂阿弥もそのひとり。原画は古画に着想を得ている。

280　ドイツ　20世紀

上野リチ《壁紙》

オーストリア人の上野リチはウィーン工房で活躍したデザイナー。建築家の上野伊三郎と結婚して日本に移った。伊三郎とともに美術大学のデザイン科の教員となり後進に大きな影響を与える。本作はセリグラフによる壁紙。

281　パプア・ニューギニア　20世紀

大太鼓

1969年京都市立芸術大学からパプアニューギニアの美術調査が行われた。その収集品315点。これはセピック河河口地方で収集された割れ目太鼓。一本の丸太を刳り抜いて作り、杵状の撥で突く。表面は多くの精霊と幾何学文で埋められる。

282　パプア・ニューギニア　20世紀

かまど

セピック河中流域にあるアイボムという村は原始的土器の産地のひとつ。手造りで成形された丸底の土器は野焼きされたもの。顔料を塗ることもある。土器には神話世界の精霊の姿を装飾として加える。このかまどの上で火を焚いて煮炊きをする。

283　パプア・ニューギニア　20世紀

棟飾り

セピック河中流域のアイボムの土器は神話的世界の中で生まれる。造形には背景となる神話がある。これは建物の棟飾り。アイボム村のウイゲイマンガという娘が空を支配する鷲と水を支配するワニを産む物語から、鷲と娘。

284　パプア・ニューギニア　20世紀

壷（サゴヤシ澱粉貯蔵用）

アイボムの土器装飾は精霊あるいは祖霊の姿である。神話によれば、はじめ土器は生きており自ら話し動いたが、ある精霊の魔法により動かなくなったという。これは主食となるサゴヤシの幹から採る澱粉を貯蔵するための壺。

285　パプア・ニューギニア　20世紀

語る人の椅子

セピック川中流域での収集品。一見椅子の形をしているが、本体は椅子の背面に彫刻される祖霊である。この地域の集落には集会所として「精霊の家」があり、像はその中に置かれる。人は皆に語りかける時、像の傍らに立つ。

5

学舎の証し

明治27年に美術学校図案科の卒業者２名の卒業作品が買い上げられた。これが本学卒業作品収集のはじまりである。前年に東京美術学校が卒業作品の買い上げを開始しており、当時の両校の密接な関係から、始められたものであろう。戦前まで、図案科と絵画科の作品が買い上げられたが、漆工科と彫刻科にはこの制度はなかった。収蔵する空間と購入原資の問題があったものと思われる。美術工芸学校、絵画専門学校とも選択的に買い上げられたが、戦中にはこの作品を遺し戦没した学生も少なくない。作品の存在が若き美術家たちの学舎であることを伝える。

286 1900年

幸野西湖《孤村流水》

卒業作品の購入が始まるのは1894年。以後毎年選択的に収集され、現在は千点を超す。これらは学舎の証しとなっている。本作もそのひとつ。西湖は幸野楳嶺の次男で、はじめ父と谷口香嶠に学び、後に竹内栖鳳門下となる。

287 1900年

戸田天波《少女》

天波は岡山の人。はじめ鈴木派の今尾景年に師事するが、その後上京し、橋本雅邦塾に入る。この頃同郷の彫刻家平櫛田中と親交を結び、東京美術学校でも日本画を学んだ。美術工芸学校卒業作品の本作は、初号華渓時代のもの。

288 1900年

川畑春翠《笠置落城》

京都生まれの春翠は山元春挙に師事する。これは美術工芸学校の卒業作品。当時流行した歴史画においても尚武の気運が高まっており、絵巻など大和絵の古画に取材しつつ軍記物である太平記から笠置落城の場面を描く。教員には歴史画家谷口香嶠もいた。

289 1900年

北垣静処《春光》

静処は元京都府知事北垣國道の長男。男爵家に生まれながら美術工芸学校を卒業し、鴨緑茶話会という青年画家の研究団体を結成するなど、美術に強い関心があった。卒業作品は、花摘みに興じる童女らを描いて気負いがない。

290 1901年

清水古関《厩戸皇子》

古関は岐阜垂井の生まれ。雅号は郷里の不破の関にちなむ。中学卒業後画家をめざし美術工芸学校に入学、竹内栖鳳、菊池芳文に学ぶ。画塾を主宰し、岐阜画壇の興隆に尽力する。当時卒業作品に仏教的主題は珍しくなかった。

291 1901年

岡文涛《暗中出手》

京都宮津の人文涛は山元春挙の門下。後に花鳥を得意とするが、美術工芸学校の卒業作品では、西洋風の陰影表現を研究した。画題は不明、当時の青年画家の多くは、欧州から新しい知見を得た師の影響を受けてこの道を歩んだ。

292 1902年

岸米山《恨涙》

米山は岸竹堂の孫。若くして才能を見せたが30代で夭折した。本作は美術工芸学校の卒業作品。画題は重く、戦の中に倒れ行く武士の悲哀を描く。矢の飛び来る一瞬を切り取り、歴史画に西洋画の劇的な描写を加えようとした。

293 1905年

高倉観崖《夕陽》

大分生まれの観崖は、文展をはじめ官展への出品で知られる。美術工芸学校の卒業作品は、用筆を重視しつつ光を主題にとりあげ、空気遠近法で空間を描こうとする。こうした感性が観崖を再び上洛させ、山元春挙門下とさせた。

294 1905年

入江波光《春雨》

波光は幸野楳嶺の長男森本東閣に師事してのち美術工芸学校に進む。卒業作品の本作は、春雨の中、桜樹に佇む山鳥を描く。四条派の付立てを活かしつつ、空間や量感を意識した表現は、当時の教員が持つ問題意識と共鳴した。

295 1906年

渡辺与平《狐》

与平は長崎生まれ。初号はその口癖から抜天。美術工芸学校では日本画を学ぶが、鹿子木孟郎、中村不折に学び洋画に転身。官展に入選する。雑誌のコマ絵で人気を博し、当時竹久夢二と人気を分かつが、24歳で夭折した。卒業作品にはすでに洋画の眼がある。

296 1907年

村上華岳《羆》

華岳は画塾と関わりがない。京都での学校教育の中に育った画家である。美術工芸学校卒業作品の本作は、動物を主題とする当時の課題制作と思われる。写生を重んじながらも、華岳の描く画には個性的な造形が見られる。

297 1907年

松浦舞雪《兎》

広島生まれの舞雪は絵画専門学校卒業の後、大阪を拠点に画業を展開した画家。後に北野恒富の大正美術会に加わり女性風俗を描く。美術工芸学校の卒業作品では、課題制作の動物を制作。用筆は古めかしいが、画想は新しい。

298 1907年

榊原紫峰《軍鶏》

紫峰の美術工芸学校卒業作品。課題制作ながら軍鶏は特徴的な姿から画題として好まれた。付け立ての学習に格好の教材だったためである。榊原家に伝来する素描の中に、教員竹内栖鳳が自ら羽毛の描き方を教示した図が遺る。

299 1914年

徳岡神泉《水汀》

神泉の美術工芸学校卒業作品。校友会展で銀牌を受けた。「うしろの笹藪を冷たい風がびゅっと吹き抜け」た「さむざむとした感じ」を描いたものと自身の画想を語る。後年凝縮された象徴的景観を描くが、その感覚の萌芽は早い。

300 1915年

福田平八郎《雨後》

絵画専門学校が開校すると、画塾に属さないまま画家として活動する者が増す。平八郎もそのひとり。美術工芸学校の卒業作品では六曲一双屏風の大構図に挑戦。焼緑青と胡粉による簡潔な色彩構成で萩を描く。すでに写生に根ざしながらも平明な世界を求める。

301 1916年

前田荻邨《銃響》

神戸生まれの荻邨は、西村五雲の弟子。美術工芸学校の卒業作品では、師の得意とする動物画を描く。銃声に驚き走り去る冬毛の鹿の群れを細かに描き込むが、作者のこだわりは吹きつける雪の動きと風を捉えるところにある。雪の色と形が画面に密度を与える。

302 1916年

中村大三郎《柔かき日蔭》

後に現代女性風俗を得意とする大三郎が描いた四曲屏風の花鳥画。当時の卒業作品では絹本で大画面が描ける屏風に人気があった。写生教育から得た実感を琳派風の古典的な装飾性の中に活かそうと試みる。梅樹や草花へのたらし込みによる着彩が効果的。

303 1916年

玉城末一《幽遠》

大阪堺に生まれた末一の美術工芸学校卒業作品。俯瞰する岩場を背景に全身に光を浴びてたたずむ孔雀は写生に正確だが物憂げである。大きな渦を描くような構図は動きと不安感を共存させる。人物画を主題とすることが多い末一の作品にはどこか陰りがある。

304 1917年

稲垣仲静《豹》

25歳で夭折した仲静が20歳の時描いた美術工芸学校の卒業作品。動物園での写生から画面を構成する。豹の群れのように見えるが、一匹の姿を緻密に組み合わせたもの。抑制された色彩と鋭くしなやかな線描が緊張感を作り出す。

305 1920年

清水六兵衛（六代）《鷲》

京焼の家に生まれた六兵衛だが、父六和の考えもあって、美術工芸学校から絵画専門学校まで日本画を学ぶ。根本的なところから陶芸の修行を行うためである。製陶は24歳から始めた。本屏風は最初の卒業作品。吸収した写生教育の成果をみせる。

306 1940年

野添草一《赭土》

草一は日本画家野添平米の長男。美術工芸学校から絵画専門学校に進むが、繰り上げ卒業して出征。中国において戦死した。21歳であった。太平洋戦争直前の不穏な空気が焼けるような赤土の山肌に非日常的な風景を描かせる。

307 1941年

吉岡茂夫《丘の樹》

兵庫に生まれた茂夫ははじめ油絵を学んでいた。人望があり風貌から学校ではガンジーとあだ名された。絵画専門学校を繰り上げ卒業となり出征。フィリピンにおいて帰らぬ人となる。淀の風景を描く美術工芸学校の卒業作品にはアルミ泥を用いて新味を工夫した。

308 1942年

中井俊一《冬木》

俊一は魚衣と号した。美術工芸学校卒業後、上村松篁に師事したが、まもなくフィリピンに出征する。当時多くの学生が学業半ばにして戦地に赴いた。病を得て帰国した俊一は絵画専門学校の卒業を迎えることなく病歿する。

309 1894年

奥村耕仙《婦人衣装図案》

耕仙は美術学校最後の卒業生のひとり。彼らの卒業作品が学校買上げ第１号となる。ここから卒業制作収集が始まった。前史として画学校時代に卒業後生徒が自弁で作品を寄付する制度があった。残念ながら作品は遺らない。

310 1897年

岐美竹涯《英雄末路図》

竹涯は美術工芸学校図案科を卒業。当時の教員は谷口香嶠ら日本画家があたる。絵画教育が重視され、卒業作品として歴史画も描いた。初期の図案教育は古代の紋様意匠の学習から始める。図案は実用的な絵画と見られていた。

311 1900年

沢田宗山《友禅図案》

美術工芸学校を卒業した宗山は東京美術学校に進み、さらに米国に留学して図案を学ぶ。帰国後、京都に図案所を設立して幅広い製品の図案改良に貢献した。学校を巣立った最初の図案家といえる。陶芸家としても知られるが、卒業作品は友禅による壁掛け図案。

312 1900年

猪飼嘯谷《装飾図案》

嘯谷の図案科卒業作品は２点ある。ひとつは日本画、いまひとつがこの友禅による室内装飾図案。当時の学校では複数の作品を卒業作品にできた。卒業後歴史画家となる嘯谷は、図案科の教員として伝統的意匠の教育を支えた。

313 1903年

梅戸在貞《朝昼夕意屏風図案》

原派の梅戸在勤を父に持つ在貞は、肖像画を得意とする有職画家。宮中からの御用を受けることも多い。図案科に学んだのも、調度の製作など家業に関わる必然があった。卒業作品は形状意匠ともアールヌーボーの影響を受ける。

314 1903年

三崎彌三郎《化粧棚図案》

彌三郎は美術工芸学校を卒業し京都高等工芸学校に進む。辰野金吾の下で家具や器具の意匠を担当、木内真太郎と出会いステンドグラスの世界に入る。小川三知とも交流があった。卒業作品は和風趣味にアールヌーボーを加味。

315 1904年

秦テルヲ《藤花蒲公英応用卓被図案》

テルヲは日本画家。家庭の事情から職のため図案科に学ぶ。千種掃雲や土田麦僊に交わり新しい絵画を模索した。社会的な主題を描くことで知られるが、当初は千總に勤めながらの制作である。卒業作品は室内装飾用組物から。

316 1905年

高橋五山《芍薬模様衝立図案》

五山は美術工芸学校の後東京美術学校を卒業。出版の道に進んだ。幼年雑誌の編集者となり、印刷による単純で明快な紙芝居の改良に尽力した。その功績は今なお高橋五山賞の名に遺る。卒業作品は当時流行の植物文様を応用。

317 1905年

原在寛《源氏紅葉賀之意書院飾器具之内硯箱置時計図案》

在寛は有職画家として知られる原派の五代。在泉を父に持つ。家業では有職意匠の応用制作も多かった。これは美術工芸学校卒業後に研究を深める課程として1899年に設けられた専攻科の修了作品。伝統的意匠も重視された。

318 1904年

古東淡山《菖蒲模様屏風図案》

図案科教員谷口香嶠が琳派研究を発表するのは明治中期のこと。神坂雪佳らによる本格的な琳派再興の先駆けとなる。美術工芸学校の卒業作品にも琳派の影響は少しずつ表れ、本作など明らかに尾形光琳の見立てながら、そこに写生風が加わる。

319 1906年

千熊章禄《春興之意壁掛図案》

鳥取出身の章禄は美術工芸学校から東京美術学校に進む。図案科教員を長く務め、東京の図案教育を京都の課程に反映させた。卒業作品は古典意匠による染織図案。彼の教育では建築装飾や工業製品の意匠開発が加えられた。

320 1907年

伊吹蘚石《秋の野蒔絵屏風図案》

美術工芸学校には漆工科があった。卒業作品は遺らない。わずかな図案科作品に当時の漆芸への接近が記録される。蘚石は谷口香嶠に師事する歴史画家。後に図案科教員を務めた。これは色粉蒔絵に螺鈿を加えた漆屏風図案。

321 1907年

布施喆詮《芥子応用寝台掛図案》

滋賀に生まれた喆詮は、はじめモスリン友禅の図案を描いたが、ロール式機械捺染の拡大とともに捺染絣の図案を考案し活躍した。美術工芸学校の卒業作品では形の抽出に図案科の教育方針である写生の徹底が活かされる。

322 1916年

小合友之助《モザイク壁飾図案》

友禅の型彫師の家に生まれ、若き日に龍村織物で図案を制作した友之助。図案科の卒業作品は建築装飾の課題から、王朝趣味の意匠によるモザイク壁画図案である。戦後は美術大学の教員として、美術工芸の世界を開拓した。

323 1923年

塚本圀太郎《段通図案》

緞通は中国から渡った毛足の長い絨毯。図案科では敷物を室内装飾の重要な構成要素として課題にした。また一方で、海外の図案意匠の模写と応用には多くの時間が費やされており、この卒業作品にも豊富な成果の一端が表れる。

324 1929年

森田富次郎《タイル(陶板)図案》

エジプト壁画の印象を、当時生徒の関心を集めたアールデコの様式で構成した図案科の卒業作品。壁面装飾のための陶板として考案され、産業の面から陶芸を模索した成果。よく制作された緞帳図案と同様に麻布に着彩される。

325 1934年

宇佐美滝三郎《夜会服図案》

滝三郎は美術工芸学校を卒業すると京都高等工芸学校に進む。後に高島屋の図案部で室内装飾に関わり活躍した。卒業作品は衣装。当時、総模様の夜会服や婚礼衣装の図案は、三枚襲の裾模様とともに人気の染織課題である。

326 1935年

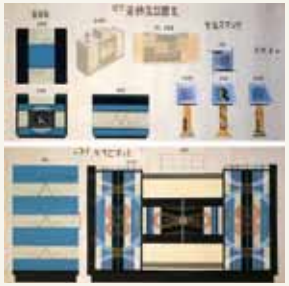
松本清《装飾電灯図案》

中国、日本、インドネシアの美術から着想を得て考案した装飾電灯の図案。課題の主流となった内外美術の応用による図案科卒業作品である。戦局の拡大により日本が進出した地域に取材したものだが、作者は戦没者に名を連ねる。

327 1938年

竹岡義雄
《ポスター図案(オリンピック六題)》

図案科の教育も当初は染織など京都の地域産業に関わるものが多かった。商業美術として、ポスターやショーウィンドーの図案が加わるのは昭和戦前期である。作品は戦争で中止された1940年東京五輪のためのポスター。



328 1939年

杉本正《近代装飾家具図案》

戦前期の図案科の課題に和洋家具や床飾工芸品の意匠考案がある。従来の伝統工芸のみならず、本作のように蓄音機やレコードキャビネットなど機能性を求める近代的な品目が増加する。教育は次第に現代のデザインに近づく。

329 1939年

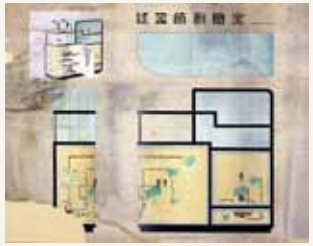
吉田立治
《ステンドグラス図案(温室景観)》

1939年絵画専門学校に図案科が生まれる。美術工芸学校図案科卒業後、外部進学せずとも高度な教育を受けられるようになり、進学者も増した。立治はその第１期生。建築装飾の課題としてステンドグラスも人気があった。

330 1941年

楠田信雄《染織屏風図案(東亜共栄圏内南方民族の踊り)》

信雄は絵画専門学校図案科の第２期生。しかし繰り上げ卒業式の当日に応召し、沖縄戦で特攻戦死する。父は染色家楠田撫泉。美術工芸学校の卒業作品も染色屏風でインドネシアの宮廷舞踊を図案にする。主題にも戦局が表れた。



331 1941年

堂本元次《漆器飾棚図案》

元次は堂本印象の甥にして弟子。戦後日本画家となるが美術工芸学校では図案科を卒業。卒業作品は色漆による近代意匠の飾棚図案である。在学中の日記には家具店の見学など当時の教員千熊章禄の指導の様子が伝えられる。

332 1911年

榊原雨村《赤土山》

雨村は榊原紫峰の兄。小猿の群れを描く２曲屏風は絵画専門学校の卒業作品である。学生時代の素描と画稿が遺され、動物園での素描を使って群像を構成し、周囲の景観を次第にそぎ落として象徴的な画面を求める過程がわかる。

333 1911年

松宮芳年《堺の相生橋》

芳年の絵画専門学校卒業作品。大阪堺市の相生橋は新地の運河に架かる橋で、かつて付近に多くの煉瓦工場があった。洋画の影響を受け、広く取り込んだ群青色の水面に空の光を描く工夫が新鮮。やがて関東に移り、左京の号で青龍社に加わる。

334 1911年

村上華岳《二月の頃》

華岳の絵画専門学校卒業作品。吉田山から東山銀閣寺方面を望む景観を描く。はじめ新古美術品展に《早春》として出品、文展出品の際この画題となった。近代的な視点から清澄な空気を描くが、山の表現に苦心したと伝える。

335 1911年

小野竹喬《南国》

岡山笠岡に生まれた竹喬が第１回仮面会展に出品した作品。瀬戸内の陽光がまぶしい郷里神島の風景を描いて、西洋近代絵画の影響を見せる。絵画専門学校の買い上げ卒業作品《祭》が、後に本作に差し替えられた経緯がある。

336 1911年

土田麦僊《髪》

佐渡に生まれた麦僊の絵画専門学校卒業作品。文展にも出品され褒状を得ている。桃割を結ったモデルは師竹内栖鳳が東本願寺山門天井画制作のため頼んだみどりという娘。師の制作の合間に弟子達も写生を許されたという。

337 1912年

柴田晩葉《柾》

大津に生まれた晩葉は、山元春挙の門下だが師の影響は弱い。絵画専門学校卒業作品は６曲の大画面。描かれるマサキの姿は、踊るかのように見え、諧謔味と親しみやすさがある。明るい色彩とともにその作風の原型を示す。郷里に支えられ愛された画家である。

338 1912年

山口八九子《短日の山》

八九子は俳人で美学の教員を務めた中川四明に俳句を学ぶ。当時画学生の多くが俳句を詠んだ。短日は冬の季語。日の短い山仕事の姿を描いた絵画専門学校の卒業作品では、後年の南画風絵画に見られる詩情がすでに主題とされる。

339 1913年

森谷南人子《麗艶》

岡山笠岡に生まれ、風景画家として生きた南人子の絵画専門学校卒業作品。西洋カルタに興じる中国女性を濃厚な色彩で描く。当時学校で展観された清人羅振玉所蔵画から仇英陸治合作の明画《美人双陸図》に画想を得ている。

340 1914年

鄭裘裳《鸚鵡》

裘裳は中国広東省の出身。本名は鄭錦。来日して美術工芸学校、絵画専門学校に学び、文展に入選。帰国して北京の中央美術学院の前身北平美術学校の初代校長を務めた。日中の画法を融合し、本作のような仕女画に優れたという。

341 1915年

窠本一洋《今年竹》

友禅図案家を父に生まれた一洋の絵画専門学校卒業作品。今年竹は夏の季語。４曲屏風の大画面へ巨大な月を背景に枝を広げる若竹を描く。装飾的な構図ながら、写生を活かした実感が雅趣を誘う。山元春挙、川村曼舟に師事し、歴史風俗画により知られた。

342 1916年

丸岡比呂史《路次の細道》

比呂史は土田麦僊に師事する。絵画専門学校の卒業作品は路地を行く女性を描く２曲屏風。作者の妻と妹と伝えられる。美術工芸学校で染織図案を学ぶだけに衣装へのこだわりが強い。障子に写る鏡台の影と提灯が夜道を表す。

343 1917年

板倉星光《はなび線香》

星光は菊池契月に師事した美人画家として知られる。絵画専門学校の卒業作品は線香花火に興ずる二人の舞妓と芸妓を描く屏風。上方生まれとされる線香花火の名は香炉に立てて鑑賞したため。花町では余興として楽しまれた。

344 1917年

島田滴州《人形芝居》

兵庫洲本に生まれた滴州は竹内栖鳳に師事し、写生による華麗な花鳥画を描くが、若くして画壇を退いた。絵画専門学校卒業作品では、郷里の人形芝居への思いを重ね、文楽の舞台を明快な構図と色彩で描き、近代的な画面を作る。

345 1917年

中野草雲《三輪》

草雲は山元春挙の弟子。絵画専門学校の卒業制作では神話の世界を描く。画題から奈良三輪山に伝わる活玉依姫の説話と考えられるが、画中に直接神話性を示す要素はない。杉は三輪明神の神木。大正浪漫の潮流の中に生まれた。

346 1918年

岡本神草《口紅》

神戸に生まれた神草の絵画専門学校卒業作品。第１回国画創作協会展に出品され話題となった。蝋燭の灯りに口紅をなおす舞妓の姿。華奢な身体と豪華な衣装の対比が面白い。髪飾りの銀箔の変色が惜しまれる。30代で夭折した。

347 1918年

高谷仙外《岬》

仙外には別に伸のペンネームがある。学生時代から演劇に興味を示し、絵画専門学校卒業後、京都日出新聞などに劇評を執筆。戯曲を書きながら、評論活動を行った。卒業作品は舞台を見るような横長構図に描く浮世絵風風景画。『日本舞台装置史』の著作がある。

348 1918年

吉川観方《入相告ぐる頃》

夕暮れを告げる入相の鐘が響く。絵画専門学校の卒業作品は２曲１双屏風に花見帰りの若者の一群を描く。時代は江戸初期。観方は学生の頃から江馬務の風俗研究会に加わり、学校卒業後も舞台や映画の時代考証に関わった。

349 1919年

佐藤光華《三五夜中》

光華は菊池契月の弟子。女性風俗を描いて官展に活躍した。絵画専門学校の卒業作品は幻想的主題を扱う。三五夜とは中秋の名月の夜のこと。月明かりに鮑を求めて珊瑚の海に潜る海女の姿を、繊細な曲線を交錯させて描く。

350 1920年

稲垣仲静《霰日》

仲静の絵画専門学校卒業作品は風景画。東山鳥辺野の写生に、洛西衣笠での写生を組み合わせて画面を構成した。はじめ西洋の細密描写を試みていたが、この頃は中国の院体画に接近する。写生の中に意思の表現を求めていた。

351 1921年

堂本印象《世相三題》

印象の絵画専門学校卒業作品。29歳という年長者らしく、世相を主題に古典から取材した三つの物語を絵画化する。全て異なる技法で描かれ、これは紙本着彩。僧の白蔵主に化けた狐と罠をかける猟師のかけひきは狂言「釣狐」の世界である。

352 1922年

岡山聖虚《花を持てる倭娘》

広島生まれの聖虚は、はやくから信仰に興味を持ち、後にカトリック信者となる。歴史や宗教を主題とする作品が多く、ローマのバチカン美術館に《日本26聖人画》などを奉納した。絵画専門学校卒業作品は異国趣味の女性風俗。

353 1927年

澤田石民《風景》

丹波に生まれた石民の絵画専門学校卒業作品。美術工芸学校時代から風景画への関心が高く、繊細な色彩の作品を描く。国画創作協会参加の後、新樹社、柏舟社と青年画家中心の団体で活躍したが、開戦により余儀なく出征。30代で亡くなる。

354 1924年

三輪晁勢《葡萄》

新潟生まれの晁勢。父は三輪大次郎といい画学校西宗の卒業。郷土洋画界の草分けである。絵画専門学校の卒業作品は、２曲屏風に没骨法で葡萄を描く。紙の白さを活かした透明感が新鮮。後年の優れた色彩感覚を予感させる。

355 1924年

上村松篁《花鳥　椿》

上村松園を母に持つ松篁の絵画専門学校卒業作品。御香宮近くの椿を描く。入学当初、教員入江波光から概念的な物の見方を指摘され、写生と写実のあり方に悩み続けたが、卒業を間近に控えて重ねた椿の写生の中に自得した。

■略年表（京都府画学校～京都市立芸術大学）

年		月日	事項	校名	校地
明治11年	1878	8月15日	田能村直入、京都府知事槙村正直に、画学校設立の陳情書を提出する。		
		9月	幸野楳嶺・望月玉泉の両人、久保田米僊・巨勢小石と連署を得て、画学校設立を京都府知事に建議する。		
明治13年	1880	6月17日	京都府画学校、京都御苑内旧准后里御殿を仮校舎とし、画学校創立事務の取扱いを開始する。	京都府画学校	京都御苑旧准后里御殿
		6月19日	京都府は京都府画学校規則及教則を発布し、出仕任用内規を定め、田能村直入を用掛に、府下知名画工43人を出仕に任用する。		
		6月30日	東西南北の四宗を置き、東宗日本写生画大和絵類に望月玉泉、西宗西洋画に小山三造、南宗文人画に谷口藹山、北宗狩野派雪舟派類に鈴木百年・幸野楳嶺を担当・副教員とする。修業年限を３年とする。		
		7月1日	京都府画学校開校式を挙行する。		
		8月27日	生徒募集、定員各宗20人とする。入学年齢14歳以上、但し下等小学全科卒業生は年齢に満たなくとも入学を許可する。		
明治14年	1881	11月	石版局を置き、書画を印刷する。		
明治15年	1882	10月9日	仮校舎暴風のため破損、河原町織殿内に移転する。		河原町織殿
明治16年	1883	12月	アムステルダム万博に生徒作品を出品、金牌を受ける。		
明治17年	1884	12月22日	生徒の新画競進会を開催する。		
明治18年	1885	6月	卒業生作品を学校に遺すため、卒業生製画心得を定める。		
		6月1日	河原町元勧業場跡へ移転する。		河原町元勧業場跡
		7月1日	四宗に加え、石版画科を置く。		
		7月11日	ロンドン衛生博に出品、２等銅牌を受ける。		
明治19年	1886	9月	石版画科を廃す。		
明治20年	1887	10月24日	田能村直入より書画器物の寄贈を受ける。（収蔵品第1号）		
明治21年	1888	2月14日	四宗を改め、普通画学科・専門画学科・応用画学科を置き、修業年限５年、入学資格を尋常小学校卒業以上とする。		
		3月1日	東南北三宗を一括して本邦絵画とし、西洋画と対置させる。		
		10月	生徒服制を定める。		
		11月	応用画学科に修業年限３年の速成科及び別科を置く。		
明治22年	1889	9月7日	入学資格を高等小学校卒業以上とする。		
		12月17日	京都市の経営に移り、京都市画学校と改称。京都御苑内博覧会東館に移転する。	京都市画学校	京都御苑内博覧会東館
明治23年	1890	2月21日	西洋画科廃止の方針により、同科新入学を許可せず。		
		3月23日	東山華頂山麓知恩院内通照院に移転する。		知恩院通照院
明治24年	1891	4月1日	京都市美術学校と改称し、絵画科・工芸図案科甲部の修業年限を５年、工芸図案科乙部の修業年限を３年とする。	京都市美術学校	
		4月1日	製図規程を設け、美術工芸家の依頼に応じ、図案の意匠を作成することになる。		
明治26年	1893	3月3日	元府知事北垣國道より京都市岡崎町の田地４反２畝８歩の寄付を受ける。		
		3月5日	京都御苑内東南隅の新校舎に移転する。		
明治27年	1894	？？	シカゴ万博に生徒作品出品、銅牌を受ける。		
		6月26日	彫刻科を新設する。各本科の修業年限を５年とし、別に１年の予備科を置く。		
		8月8日	京都市美術工芸学校と改称する。	京都市美術工芸学校	吉田校舎
明治28年	1895	4月27日	美工依頼品制作規定を制定する。		
		10月2日	漆工科蒔絵部及桒漆部を新設する。		
		10月21日	校友会を組織する。		
明治29年	1896	8月28日	予備科の修業年限を２年に延長する。		
		11月1日	第１回校友大会。会員作品を陳列する。		
明治32年	1899	9月1日	授業料徴収の規定を廃す。		
		9月30日	工芸図案科を図案科と改称し、漆工科を描金科と改称する。また各科修業年限を４年とし、予備科を廃し、各科に修業年限２年の専攻科を置く。本科卒業後の実技専攻に関する規定を設ける。		
明治33年	1900	4月	市立図案調製所、美術工芸学校所属となり、図案調製部とする。		
		6月15日	依頼品制作規定を廃止し、応請図案調製規定を制定する。		
明治34年	1901	5月8日	文部省令により、校名を京都市立美術工芸学校と改称する。	京都市立美術工芸学校	
明治35年	1902	3月5日	校友会誌『美術及美術工芸』創刊する。（明治36年まで）		
		4月	絵画科・図案科実習室内の座業の習慣を改め、画架・椅子を用いることとする。		
		5月21日	授業料を再び徴収することとする。		
明治36年	1903	9月10日	第５回内国勧業博覧会に出品の生徒作品三等賞を受ける。		
明治37年	1904	？？	美工生徒作品セントルイス万国博覧会に出品、金牌を受ける。		
		4月8日	描金科実習室においても座業を改め、椅子・卓子を用いることとする。		

年		月日	事項	校名			校地
明治38年	1905	12月	校則改正。各科に英語及び地理を、図案科に図案法などを加え授業時数を増す。	京都市立美術工芸学校			吉田校舎
明治40年	1907	4月26日	専攻科を廃し研究生徒規定を置く。				
		6月21日	応請図案調製規定を廃止、応需製作に関する規定を制定する。				
		7月6日	上京区吉田川端通荒神口上ル二筋目東入ルの新築校舎に移転する。				
明治41年	1908	5月20日	描金科を漆工科に復す。２年の予科を設置する。				
明治42年	1909	4月1日	京都市立絵画専門学校創立。吉田町の美術工芸学校の校舎の一部を借用し授業を開始する。生徒定員150人。修業年限予科２年、本科３年、研究科２年とし、入学資格を中学校卒業以上とする。		京都市立絵画専門学校		
		7月1日	京都市立絵画専門学校開校式を挙行する。学校の起源は画学校であり、その創立は明治13年当月当日のために７月１日を創立記念日と定める。校友会誌『美』創刊する。（昭和６年まで）				
		11月	美工会設立する。				
明治43年	1910	7月15日	日英博覧会の出品作品に対し、同会より名誉大賞を受ける。				
		10月1日	皇太子殿下、両校に行啓。竹内、菊池、山元3教諭、席上揮毫。職員16人の画帖、生徒絵葉書を贈る。生徒作品展を行う。				
明治44年	1911	1月9日	絵画専門学校校舎新築落成する。				
大正 2年	1913	4月25日	校友会文芸誌『絵美倶楽部（７月『二葉』に改称）』創刊する。（昭和６年まで）				
大正 3年	1914	7月10日	東京大正博覧会出品の両校成績品、銀牌を受ける。				
		7月20日	美術工芸学校の校則を改正し、予科・本科・研究科・別科を置く。				
大正 4年	1915	12月24日	米国パナマ太平洋万国博に出品の生徒作品、金牌を受賞する。				
大正 6年	1917	2月1日	公立学校職制発令され、絵画専門学校教諭・助教諭は、教授・助教授と改称する。				
		12月15日	大礼建築の払い下げによる絵専・美工両校講堂・集会室が新築落成。				
大正 7年	1918	5月12日	絵専同窓会を組織する。				
大正 8年	1919	5月19日	皇后陛下、両校に行啓。生徒は学生服を新調する。教授６名の御前揮毫を行う。同絹本画６幀、皇后陛下に献上する。				
		6月18日	絵画専門学校本科卒業生で実業学校を経由した者も中学校経由者同様、中等学校図画科教員無試験検定の受験資格を与えられる。				
大正12年	1923	4月1日	美術工芸学校の予科を廃止し、修業年限５年とする。				
大正13年	1924	4月12日	絵専・美工教員、辞職願を提出する。（絵専騒動）				
		12月25日	両校生徒作品をパリの現代装飾及び工芸品万国博に出品する。絵専は銅牌、美工は金賞を受ける。				
大正14年	1925	4月1日	絵画専門学校別科生を選科生に、研究科２年を５年に改める。研究科を定員外とする。				
大正15年	1926	6月1日	絵専・美工卒業制作品図録の刊行を開始する。（昭和18年まで）				
		6月10日	京都市東山区今熊野日吉町50番地51の新築校舎に移転する。				今熊野校舎
昭和 3年	1928	3月6日	名古屋離宮内障壁画調査撮影を行う。				
		3月16日	絵専・美工同窓生有志より新築記念として前庭噴水池の建設寄付を受ける。				
昭和 4年	1929	4月8日	校舎内上草履制を廃止する。				
		11月24日	第９回帝展京都陳列会に両校を会場とする。				
昭和11年	1936	4月1日	美工漆工科を廃す。				
昭和12年	1937	12月24日	南校舎新築落成する。				
昭和14年	1939	4月1日	絵専に図案科を新設し、修業年限を予科１年、本科３年とする。				
		4月11日	絵専研究科生の画塾在籍の禁止を決める。				
昭和15年	1940	4月1日	美工一旦廃止を決めた漆工科を復す。				
		7月1日	同窓会有志より幸野楳嶺胸像の建立寄付を受ける。京都市美術館において所蔵参考品の陳列を行う。				
昭和17年	1942	5月21日	金属の回収で、幸野楳嶺像・校門扉・丸池噴水盤などを供出する。				
昭和18年	1943	2月6日	絵専生、軍報道部より依頼の大画標を四条河原町外壁に制作開始。				
昭和19年	1944	4月1日	絵画専門学校の本科・予科の別を廃し、修業年限を４年とする。美工に工芸科と建築科を置く。				
		6月1日	絵専全校京都を離れ、彩管報国隊として各地の施設に勤労動員され、図面製作作業に従事する。				
昭和20年	1945	4月1日	京都市立絵画専門学校を京都市立美術専門学校と改称する。美術専門学校は男女共学制となり、第１回の女子学生入学する。				
昭和22年	1947	4月1日	美術専門学校は図案科を廃し、西洋画・彫刻・工芸の三科を設置する。工芸科には図案部と漆工部を設置した。		京都市立美術専門学校		
昭和23年	1948	3月4日	京都市立美術工芸学校を京都市立美術高等学校と改称する。絵画・図案・彫刻・漆工・建築の五科とする。	京都市立美術高等学校			
		10月20日	京都市立堀川高等学校に音楽課程が設置される。				
昭和24年	1949	4月1日	京都市立美術高等学校閉校する。組織は京都市立日吉ケ丘高等学校の美術課程に継承。建築科を京都市立伏見高等学校に移す。	京都市立日吉ケ丘高等学校			
		9月1日	美術専門学校研究科の修業年限を３年とする。				
昭和25年	1950	4月1日	京都市立美術大学として美術学部（日本画科・西洋画科・彫刻科・工芸科の四科、工芸科は図案・陶磁器・塗装・染織図案の四専攻）を置き、修業年限４年、学生定員380人として第１学年の入学並びに第２学年の編入学を行い発足する。京都市立堀川高等学校に音楽専攻科を開設する。		京都市立美術大学	京都市立堀川音楽高等学校音楽専攻科	
		7月1日	同窓会再組織結成集会を挙行する。戦時中供出された幸野楳嶺の胸像を彫刻科教授により復し、除幕式を行う。				

年		月日	事項	校名			校地
昭和26年	1951	7月1日	美術大学、東山区北日吉町42番地１に校舎を建て分教場とする。彫刻科は分教場に移転する。美術大学同窓会、同窓生名簿を刊行する。	京都市立日吉ヶ丘高等学校	京都市立美術大学	京都市立堀川音楽高等学校音楽専攻科	今熊野校舎
		9月23日	美術大学日本画科に初めて外国人特別研究生を受け入れる。				
昭和27年	1952	2月	美術大学に教職員免許状取得のための教職課程設置が認可される。				
		2月9日	美術大学美術教育研究会結成。				
		4月1日	京都市立音楽短期大学が北区出雲路立本町103番地に開校する。作曲指揮科・器楽科（ピアノ専攻・ヴァイオリン専攻）・声楽科の三科二専攻。定員約80人。			京都市立音楽短期大学	
昭和28年	1953	3月	美術大学に修業年限２年の専攻科設置が認可される。				
昭和30年	1955	4月23日	音楽短期大学同窓会、「真声会」と命名する。				
昭和31年	1956	9月5日	音楽短期大学が左京区聖護院円頓美町46番地２（元京都市警察学校）に移転する。				
昭和36年	1961	10月24日	中近東における工芸美術調査に教員を派遣する。				
昭和37年	1962	3月31日	美術大学に陳列館落成する。				
		4月1日	美術大学に博物館学課程を設置する。				
昭和38年	1963	4月1日	工芸科の入学定員を25人に増員する。工芸科の図案専攻をデザイン専攻に、染織図案専攻を染織専攻と改称する。専攻科においても、図案専攻をデザイン専攻に、染織図案専攻を染織専攻と改称する。				
		4月1日	音楽短期大学に専攻科を設置する。定員10人。				
昭和42年	1967	6月12日	インドネシア美術の総合調査隊を派遣する。				
昭和44年	1969	4月1日	美術・音楽の二学部により京都市立芸術大学が発足する。音楽学部は音楽学科を設置する。		京都市立芸術大学		
		7月	ニューギニア未開美術調査隊を派遣する。				
昭和45年	1970	1月3日	美術学部の南校舎を焼失する。				
		3月19日	美術学部改革案承認される。				
昭和46年	1971	4月16日	改革案に基づくカリキュラム開始。造形コース（日本画･西洋画･彫刻）･工芸コース（工芸科の陶磁器･塗装･染織）･デザインコース（工芸科のデザイン）及び版画･映像の共通実技教室を開設する。				
昭和48年	1973	7月25日	彫刻・工芸における地中海、オリエント意匠の東漸調査隊を派遣する。				
昭和54年	1979	7月1日	美術学部同窓会誌『象』創刊する。				
昭和55年	1980	3月24日	西京区大枝沓掛町13番地６に新築移転する。	京都市立銅駝美術工芸高等学校			沓掛校舎
		4月1日	共通実技映像と構想設計を併せ構想設計とし版画とともに専攻として独立する。共通ガイダンスを総合基礎に、工芸ガイダンスを工芸基礎に、西洋画専攻を油画専攻に、塗装専攻を漆工専攻にそれぞれ改称する。日本画基礎・油画基礎・彫刻基礎各半年を１年とする				
		4月1日	京都市立日吉ケ丘高等学校美術工芸課程が京都市立銅駝美術工芸高等学校となる。				
		4月1日	大学院美術研究科（絵画・彫刻・デザイン・工芸・芸術学の五専攻）を新設する。				
昭和56年	1981	3月1日	芸術大学『百年史』刊行する。				
		3月20日	美術学部『卒業制作図録』復刊する。				
		4月1日	大学院美術研究科に教職課程を設置する。				
		11月2日	講堂落成する。				
昭和57年	1982	4月1日	学則を改正する。美術学部について美術専攻科を廃止し、美術科（日本画・油画・彫刻・版画・構想設計の五専攻）・デザイン科（ビジュアル・環境・プロダクトの三専攻）・工芸科（陶磁器・漆工・染織の三専攻）の三科十一専攻に変更する。				
昭和61年	1986	4月1日	大学院音楽研究科（作曲・器楽・声楽の三専攻）を新設し教職課程を設置する。				
平成2年	1990	1月11日	京都市四条ギャラリーで芸術大学担当の展示が開始する。				
平成3年	1991	4月1日	京都市立芸術大学芸術資料館を開設する。				
平成6年	1994	3月31日	大学会館竣工する。				
平成11年	1999	4月1日	美術学部に総合芸術学科（定員５人）を設置。美術学部定員130人となる。				
平成12年	2000	2月28日	新研究棟竣工する。				
		4月1日	大学院美術研究科博士（後期）課程及び、大学院美術研究科修士課程保存修復専攻を設置する。				
		4月1日	日本伝統音楽研究センターを開所する。				
		4月1日	美術学部・音楽学部にセメスター制を導入する。				
平成14年	2002	4月1日	音楽学部に音楽学専攻（定員３人）を設置する。				
平成15年	2003	4月1日	大学院音楽研究科博士（後期）課程を設置する。				
平成22年	2010	4月2日	京都市立芸術大学ギャラリー@ KCUA を開設する。				
平成24年	2012	4月1日	公立大学法人京都市立芸術大学に移行する。				
平成26年	2014	4月1日	芸術資源研究センターを開設する。				

■資料目録

1　絵を学ぶ道

通番	名称	作者不詳	備考	法量（縦×横×奥cm）	形状	技法	収蔵番号
001	略画運筆模本	幸野楳嶺	画学校絵手本（北宗）	31.0×33.3cm	折帖（20図）	墨画	132130001000
002	減筆花卉運筆模本	幸野楳嶺	画学校絵手本（北宗）	31.0×33.3cm	折帖（18図）	墨画	132130002000
003	羅漢図	鈴木松年	画学校絵手本（北宗）	30.7×33.7cm	裏打	膠彩	137580030000
004	椿図	望月玉泉	画学校絵手本（東宗）	30.7×33.7cm	裏打	墨画	137620001000
005	蜥蜴図	望月玉泉	画学校絵手本（東宗）	31.2×34.2cm	裏打	膠彩	137620020000
006	蜻蛉図	望月玉泉	画学校絵手本（東宗）	31.3×33.7cm	裏打	膠彩	137620017000
007	唐子遊亀図	鈴木松年	画学校絵手本（東宗）	30.8×34.3cm	裏打	膠彩	137580002000
008	竹図（筆法）	池田雲樵	画学校絵手本（南宗）	31.3×34.3cm	裏打	墨画	137590037000
009	蘭図（筆法）	池田雲樵	画学校絵手本（南宗）	31.3×34.4cm	裏打	墨画	137590010000
010	人物十八描法（蚯蚓描）	池田雲樵	画学校絵手本（南宗）	31.1×33.1cm	裏打	墨画	137580008000
011	岩図（筆法）	巨勢小石	画学校絵手本（南宗）	30.7×34.4cm	裏打	墨画	137690044000
012	山水図	巨勢小石	画学校絵手本（南宗）	31.0×34.5cm	裏打	墨画	137670079000
013	CORPUS CHRISTI DAY	EDWARD GUSTAV MAY SOHNE	画学校絵手本（西宗）	42.5×32.1cm	まくり	リトグラフ・著彩	141540001000
014	弾琴図	幸野楳嶺	画学校絵手本	37.5×26.8cm	裏打	膠彩	137580040000
015	草花図（骨描）	幸野楳嶺	画学校絵手本	27.0×38.7cm	裏打	墨画	137600021000
016	啄木鳥図	今尾景年	画学校絵手本	26.7×37.8cm	裏打	膠彩	137640024000
017	梅図	幸野楳嶺	画学校絵手本	31.2×43.3cm	裏打	墨画	137610059000
018	藤図	森寛斎	画学校絵手本	26.7×37.8cm	裏打	膠彩	137610056000
019	竹内栖鳳絵手本集	竹内栖鳳		33.0×426.0cm	巻子	墨画・膠彩	116080001000
020	竹内栖鳳絵手本集	竹内栖鳳		32.6×239.0cm	巻子	墨画・膠彩	115950001000
021	019に同じ						
022	020に同じ						
023	牛	竹内栖鳳		67.0×44.8cm	軸	墨画・膠彩	116040001000
024	黄蜀葵	山元春挙		66.5×44.7cm	軸	膠彩	117340001000
025	松蕈	山元春挙		67.0×45.5cm	軸	墨画・膠彩	117330001000
026	栗にひたき	山元春挙		66.6×44.7cm	軸	墨画・膠彩	117380001000
027	月に竹	山元春挙		67.8×45.4cm	軸	墨画・膠彩	117370001000
028	谷口香嶠絵手本集	谷口香嶠		29.0×96.8cm	巻子	膠彩	116350001000
029	028に同じ						
030	つるもどきに目白	谷口香嶠		32.0×67.0cm	軸	膠彩	116290001000
031	山さくら	菊池芳文		83.3×47.1cm	軸	墨画・膠彩	116660001000
032	藤に燕	菊池芳文		134.1×59.5cm	軸	墨画・膠彩	116480001000
033	鴛鴦	菊池芳文		42.3×72.7cm	軸	膠彩	116630001000
034	桜に目白	川北霞峰		33.3×28.1cm	軸	膠彩	117520001000
035	川村曼舟絵手本集	川村曼舟		28.2×89.4cm	巻子	墨画・膠彩	116860001000
036	仲芳暁絵手本集	仲芳暁		31.0×134.3cm	巻子	墨画・部分膠彩	117310001000
037	呂洞賓図（郭存仁）	田能村直入	田能村直入旧蔵資料	73.8×32.3cm	軸	墨画・部分膠彩	100010022000
038	加茂祭草紙	田中訥言		35.8×1680.0cm	巻子	膠彩	100330001000
039	葡萄図（日観子温）	狩野探幽		41.0×57.7cm	軸	墨画	100900001000
040	桃李園図（仇英）	円山応挙	（京都：知恩院／原本）	195.0×117.0cm	軸	墨画・部分膠彩	101080001002
041	百鬼夜行絵巻	作者不詳		37.8×522.8cm	巻子	墨画・部分膠彩	123410001000
042	付喪神絵詞　上巻	作者不詳		19.6×1240.8cm	巻子	墨画・部分膠彩	122990001001
043	荏柄天神縁起　巻1	谷文晁		30.3×1235.4cm	巻子	膠彩	121570001001
044	二十四孝図（狩野山楽）	森川曽文		63.0×45.0cm	軸	膠彩	129190001009

通番	名称	作者不詳	備考	法量（縦×横×奥cm）	形状	技法	収蔵番号
045	翠簾草花源氏絵屏風（右扇）	河辺華挙		103.2×92.6cm	軸	膠彩	112930001002
046	北野天神縁起（承久本／巻5）	作者不詳	（京都：北野天満宮／原本）	53.9×910.2cm	巻子	膠彩	122000001005
047	花鳥図（狩野元信）	作者不詳	（京都：大徳寺大仙院／原本）	172.0×140.7cm	軸	墨画・部分膠彩	112530002004
048	一遍上人絵伝（歓喜光寺本／巻6）	吉村青霞	（神奈川：清浄光寺／原本）	37.8×980.2cm	巻子	膠彩	121210001006
049	伝源頼朝像	作者不詳	（京都：神護寺／原本）	141.5×113.1cm	軸	膠彩	113350001000
050	真言八祖像　龍智像（醍醐寺五重塔壁画）	作者不詳	（京都：醍醐寺／原本）	121.3×48.0cm	軸	膠彩	113440004000
051	伴大納言絵詞　上巻	田中親美	（東京：出光美術館／原本）	31.1×855.0cm	巻子	膠彩	123350001001
052	年中行事絵巻（巻9）	伝 田中親美	（京都：田中家／原本）	42.8×547.9cm	巻子	墨画	123100001003
053	源氏物語絵巻	伝 田中親美	（東京：五島美術館／原本）	21.0×532.2cm	巻子	膠彩	122190001002
054	随身庭騎絵巻	菊池芳文・谷口香嶠	（東京：大倉集古館／原本）	39.6×255.2cm	巻子	墨画・部分膠彩	122790001000
055	柳に葵図（呂紀）	西山翠嶂	（京都：妙心寺／原本）	170.3×97.8cm	軸	膠彩	113330001000
056	達磨（狩野芳崖）	徳田隣斎	（東京：東京芸術大学大学美術館／原本）	85.4×46.4cm	軸	墨画・部分膠彩	115720001000
057	扇面写経下絵	竹内鳴鳳	（大阪：四天王寺／原本）	35.6×719.0cm	巻子	墨画・部分膠彩	122850001001
058	月下猫児（岸竹堂）　模本	榊原紫峰		160.7×70.5cm	軸	墨画・部分膠彩	113560001000
059	釈迦成道図	村上華岳	（東京：東京芸術大学大学美術館／原本）	71.3×52.9cm	軸	墨画	114770001000
060	阿弥陀聖衆来迎図	入江波光	（和歌山：有志八幡講十八箇院／原本）	211.5×209.5cm	軸	膠彩	113570001001
061	十二天像 水天像	入江波光	（京都：京都国立博物館／原本）	144.0×125.5cm	軸	膠彩	113610001000
062	飛天図（法界寺阿弥陀堂壁画）	二宮一鳩	（京都：法界寺／原本）	74.0×142.0cm	軸	膠彩	113650003001
063	駿牛図	入江波光	（東京：東京国立博物館／原本）	27.3×32.4cm	軸	墨画	112100001000
064	一休和尚像（没倫紹等）	入江波光	（東京：東京国立博物館／原本）	43.0×25.8cm	軸	墨画・部分膠彩	112110001000
065	籬に小禽図	林司馬	（滋賀：盛安寺／原本）	172.0×141.4cm	軸	膠彩	113820002004
066	明恵上人像	林司馬	（京都：高山寺／原本）	145.6×57.7cm	軸	膠彩	118880001000
067	法隆寺金堂六号壁観音菩薩像	林司馬	（奈良：法隆寺／原本）	52.8×39.0cm	額	墨画・部分膠彩	118870001000
068	応挙写生図巻（円山応挙）	林司馬・吉田友一	（京都：千總／原本）	31.3×442.3cm	巻子	膠彩	121620001000
069	西行物語絵巻	林司馬・吉田友一ほか2名	（東京：文化庁／原本）	30.6×1134.2cm	巻子	膠彩	122360001000
070	北野天神縁起（弘安本）	吉田友一・林司馬ほか4名	（京都：北野天満宮／原本	30.3×1082.6cm	巻子	膠彩	122080001001
071	女史箴図巻（伝　顧愷之）	岩井弘・岩倉寿ほか2名	（英国：大英博物館／原本）	28.0×379.0cm	巻子	膠彩	120830001000

2　粉本と文書

072	明治二十二年十一月調校有品取調事件	京都府画学校	京都市立芸術大学図書館文書	28.3×20.0cm	簿冊（11丁）	墨書	141970501000
073	槇村正直像	REGAMEY, FELIX		39.5×34.0cm	額	コンテ描	101120001000
074	画学校起校上書・開学建議書・建築案図	田能村直入・幸野楳嶺ほか3名		26.0×276.5cm	巻子	墨書・著彩	132960001000
075	画黌資金献納願書	遠藤茂平		26.0×32.5cm	まくり	墨書	132800001000
076	龍馬負河図図	幸野楳嶺		120.3×34.7cm	軸	墨画	129330001000
077	田能村直入肖像写真	作者不詳		52.8×39.1cm	台紙貼	白黒写真	134800001000
078	074に同じ						
079	光論教本	大角成充	猪飼嘯谷旧蔵文書	23.7×16.0cm	冊子（37丁）	墨書	141500010000
080	美術工芸学校制服着用写真（戸島弥一郎像）	作者不詳		9.1×6.0cm	台紙貼	白黒写真	135000001000
081	御所御苑内東南隅校舎新築記念写真	成井頼佐		21.4×27.8cm	台紙貼	白黒写真	133740001000
082	セントルイス万国博覧会金牌	作者不詳		7.0×7.1×0.5cm	立体	鋳金	133340001000
083	本邦風俗図（第七冠位着用図等）	谷口香嶠・猪飼嘯谷		181.5×104.0cm	軸	墨画・部分膠彩	137520001007
084	北垣国道肖像写真	作者不詳		54.7×41.3cm	台紙貼	白黒写真	134860001000
085	吉田校舎風景写真	作者不詳		7.0×12.3cm	まくり	白黒写真	135010001000
086	絵画専門学校授業風景写真	堀真澄	日英博出品資料写真	20.7×27.1cm	台紙貼	白黒写真	134000001000
087	絵画専門学校第1回卒業写真	堀真澄		21.2×27.0cm	台紙貼	白黒写真	134440001000
088	結髪沿革図（桃山期並徳川初期　女子ノ部１）	西村霞明		217.5×76.5cm	軸	墨画	137550001005

通番	名称	作者不詳	備考	法量（縦×横×奥cm）	形状	技法	収蔵番号
089	美術工芸学校写生実習風景写真	堀真澄	日英博出品資料写真	20.6×27.2cm	台紙貼	白黒写真	133990001000
090	旧教員漆皿下絵帖	竹内栖鳳ほか10名		24.3×30.4cm	冊子（49図）	膠彩	101130001001
091	中井宗太郎肖像写真	作者不詳		53.1×40.1cm	まくり	白黒写真	134910001000
092	絵画専門及美術工芸学校新築落成記念絵葉書	京都市		9.1×14.2cm	まくり	コロタイプ印刷	134020001000
093	今熊野校舎玄関扉装飾ステンドグラス	作者不詳		48.0×19.7cm	額	ステンドグラス	133560001001
094	竹林豹虎図	石崎光瑤	名古屋城障壁画写真乾板	21.4×16.3cm	平面	撮影	140280009000
095	長崎太郎肖像写真	作者不詳		48.9×39.7cm	まくり	白黒写真	134920001000
096	馬墨画	須田国太郎		124.0×156.0cm	額	墨画	111790001000
097	土佐光信像	土佐家	土佐派絵画資料	49.3×47.2cm	裏打	墨画	130013850200
098	足利義晴像	土佐光茂	土佐派絵画資料	33.9×38.0cm	裏打	膠彩	130011650700
099	足利義輝像	土佐光吉	土佐派絵画資料	20.2×16.0cm	裏打	墨画	130011650302
100	三好義継像	土佐光吉	土佐派絵画資料	57.3×36.6cm	裏打	墨画	130011650100
101	七十一番職人歌合	土佐光吉	土佐派絵画資料	26.2×741.7cm	巻子	墨画	130015050100
102	茜屋宗佐妻像	土佐光吉	土佐派絵画資料	53.5×41.6cm	裏打	墨画	130011641900
103	今井宗久像	土佐光吉	土佐派絵画資料	53.5×40.4cm	裏打	墨画	130011842700
104	肖像画帖	土佐家	土佐派絵画資料	22.3×15.8cm	冊子（71丁）	墨画・一部膠彩	130014040100
105	土佐光則・光吉像	土佐光起	土佐派絵画資料	23.8×40.9cm	裏打	墨画	130013851200
106	柿本人麿像	土佐光成	土佐派絵画資料	86.4×36.3cm	裏打	墨画	130013883600
107	弁財天像	土佐家	土佐派絵画資料	83.4×33.0cm	裏打	墨画・部分膠彩	130011830400
108	寒山像	土佐光成	土佐派絵画資料	57.2×36.1cm	裏打	墨画	130013914200
109	片袖縁起絵巻	土佐光芳	土佐派絵画資料	33.9×527.2cm	巻子	墨画	130012400100
110	清涼殿名所絵下絵	土佐光貞・土佐光時・土佐光孚	土佐派絵画資料	30.3×1302.5cm	巻子	墨画・部分膠彩	130012130100
111	昆明池障子南面縮図	土佐光貞	土佐派絵画資料	27.8×40.4cm	裏打	墨画・部分膠彩	130011170100
112	四季花鳥図小下絵	土佐光清	土佐派絵画資料	32.5×341.0cm	巻子	墨画・部分膠彩	130010150200
113	花卉写生帖（第27紙）	土佐家	土佐派絵画資料	38.4×74.8cm	まくり	墨画・部分膠彩	130014390127
114	鳥虫画帖（第5紙）	土佐家	土佐派絵画資料	37.0×73.9cm	まくり	墨画・部分膠彩	130016150105
115	鳥虫画帖（第12紙）	土佐家	土佐派絵画資料	36.0×74.1cm	まくり	墨画・部分膠彩	130016150112
116	道具画帖（第11紙）	土佐家	土佐派絵画資料	26.6×38.5cm	まくり	墨画	130013980111
117	官女粉本（狩野探幽ほか）	石黒方好・狩野洞春		44.2×981.8cm	巻子	墨画・部分膠彩	121980001003
118	集古図　天文・地理	藤原貞幹		27.2×493.3cm	巻子	墨画	124550001002
119	祇園祭鉾調巻	横山華山	榊原家絵画資料	33.5×914.5cm	巻子	墨画	133160150000
120	太秦牛祭寫真	作者不詳	望月家絵画資料	24.5×408.8cm	巻子（まくり）	墨画・一部膠彩	141471020023
121	舞妓之図	望月玉溪	望月家絵画資料	79.0×38.0cm	まくり	膠彩	141471010035
122	大沢秋景図	望月玉溪	望月家絵画資料	107.6×42.0cm	まくり	墨画・膠彩	141472010305
123	縮図帖	鈴木百年	鈴木百年絵画資料	30.8×42.1cm	冊子（3紙）	墨画	136260053000
124	写生帖（奈良の落葉）	猪飼嘯谷	猪飼嘯谷旧蔵絵画資料	27.9×19.9cm	冊子（41丁）	墨画	141480023000
125	写生帖（八丈島）	千種掃雲	千種掃雲絵画資料	31.8×47.0cm	冊子	墨画・部分膠彩	130990036000
126	樹	伊藤柏台	伊藤柏台絵画資料	39.0×31.0cm	裏打	ペン描	130970012000
127	緋緘綬鶏	石崎光瑤	石崎光瑤絵画資料	80.0×107.3cm	額	膠彩	129240248000
128	虫類写生	石崎光瑤	石崎光瑤絵画資料	27.7×288.8cm	巻子	鉛筆描・膠彩	129240587000
129	写生帖	土田麦僊	土田麦僊絵画資料	14.6×22.3cm	冊子	鉛筆描	120310002000
130	婆珊婆演底主夜神像	憲海	田村宗立旧蔵仏画粉本	76.0×45.3cm	まくり	墨画・膠彩	130020650400
131	五部心観	憲海	田村宗立旧蔵仏画粉本	40.4×27.7cm	帖（76紙）	墨画	130020011900
132	長谷寺十一面観音像	憲海	田村宗立旧蔵仏画粉本	1107.0×227.0cm	まくり	墨画・膠彩	130020151701
133	天神七代像	憲海	田村宗立旧蔵仏画粉本	28.0×41.1cm	帖（9紙）	墨画	130020671000
134	十種神宝図	憲海	田村宗立旧蔵仏画粉本	28.4×234.2cm	まくり	墨画・膠彩	130021010501

通番	名称	作者不詳	備考	法量（縦×横×奥cm）	形状	技法	収蔵番号
135	三社権現像	作者不詳	田村宗立旧蔵仏画粉本	57.4×38.0cm	まくり	著彩	130020600800
136	葛川護法尊像	作者不詳	田村宗立旧蔵仏画粉本	65.0×38.3cm	まくり	著彩	130020612800
137	孔雀明王像	憲海	田村宗立旧蔵仏画粉本	164.2×125.0cm	まくり	墨画・膠彩	130020320100
138	勝敵毘沙門天像	憲海	田村宗立旧蔵仏画粉本	113.5×52.5cm	まくり	墨画	130020360800
139	龍猛像	憲海	田村宗立旧蔵仏画粉本	208.2×129.5cm	まくり	単色木版	130020744000
140	船玉明神像	憲海	田村宗立旧蔵仏画粉本	110.2×47.1cm	まくり	墨画	130020550700
141	不顧像	憲海・田村宗立	田村宗立旧蔵仏画粉本	67.1×46.1cm	まくり	墨画	130020832700
142	請雨経敷曼荼羅図	憲海	田村宗立旧蔵仏画粉本	112.2×100.6cm	まくり	墨画・膠彩	130020020200

3　京の美術館

143	歳寒二雅図	王中立	田能村直入旧蔵資料	133.5×68.0cm	軸	膠彩	100010018000
144	渓山深遠図	宗言	田能村直入旧蔵資料	174.0×44.6cm	軸	墨画	100010004000
145	渓山明微図	汪葑	田能村直入旧蔵資料	185.0×103.5cm	軸	墨画・部分膠彩	100010019000
146	江山無尽図巻	張洽	田能村直入旧蔵資料	30.8×215.5cm	巻子	墨画・部分膠彩	100010013000
147	米法山水図	王燾	田能村直入旧蔵資料	106.0×44.4cm	軸	墨画	100010008000
148	漁夫図	作者不詳		39.4×70.9cm	軸	膠彩	100960001000
149	花鳥図	作者不詳		179.0×102.8cm	軸	膠彩	100990001000
150	採蓮図	伝 仇英		29.0×59.4cm	軸	膠彩	111880001000
151	薬師曼荼羅図	作者不詳		88.7×59.2cm	軸	膠彩	100420001000
152	五帝図	作者不詳		79.0×57.0cm	軸	膠彩	100370001000
153	ヤマーンタカ	作者不詳		124.8×69.4cm	額	膠彩	129370001000
154	武人と会見する貴婦人	作者不詳		19.2×26.3cm	額	膠彩	101110001000
155	ラーマキエン図	作者不詳		51.6×145.0cm	額	膠彩	142480001000
156	釈迦如来二比丘図	作者不詳		277.6×88.0cm	軸	膠彩	101070001000
157	加彩婦女俑	作者不詳		46.4×16.0×13.3cm	立体	焼成・膠彩	106280001000
158	三彩武人俑	作者不詳		42.0×18.0×12.5cm	立体	焼成	106300001000
159	加彩男子俑	作者不詳		39.5×30.5×13.5cm	立体	焼成・膠彩	106660001000
160	灰陶豚小屋	作者不詳		14.0×18.6×18.3cm	立体	焼成	106460001000
161	如意輪観音像	作者不詳		82.5×38.6cm	軸	膠彩	100310001000
162	当麻曼荼羅図	作者不詳		123.7×122.0cm	額	膠彩	101220001000
163	白衣観音図	作者不詳		97.5×39.7cm	軸	膠彩	100380001000
164	天神図	作者不詳		84.5×41.0cm	軸	膠彩	100400001000
165	墨画扇面	狩野興以		27.0×57.6cm	台紙貼	墨画	101100001000
166	洛外名所絵巻	作者不詳		33.5×650.0cm	巻子	膠彩	100740001000
167	立美人図	作者不詳		90.0×30.0cm	額	膠彩	101210001000
168	文書く女と侍童図	作者不詳		76.6×35.9cm	軸	膠彩	100770001000
169	遊女宮城野図	祇園井特		63.5×37.0cm	軸	膠彩	100800001000
170	藤娘（大津絵）	作者不詳		54.6×23.0cm	軸	膠彩	100760001000
171	傘持美人（大津絵）	作者不詳		63.1×22.1cm	軸	膠彩	100820001000
172	建保中殿御会図	土佐光祐・伝醍醐冬基		33.8×454.0cm	巻子	膠彩	141180001000
173	蘭陵王童舞図	冷泉為恭		43.5×69.8cm	軸	膠彩	100860001000
174	群蝶図	谷文晁		各111.0×30.5cm	軸	膠彩	100570001000
175	三国志演義図（左隻）	鈴木百年		167.0×364.8cm	屏風（6曲）	膠彩	140240001002
176	橋立図巻	岸竹堂		26.4×400.0cm	巻子	墨画・部分膠彩	131790001000
177	春景山水図	田能村直入		136.0×54.7cm	軸	膠彩	132860001000
178	山水十二図冊	浅井柳塘		25.7×16.8cm	画冊	膠彩	132000001000

通番	名称	作者不詳	備考	法量（縦×横×奥cm）	形状	技法	収蔵番号
179	桜花禽鳥図	跡見玉枝		147.9×99.8cm	軸	膠彩	131990001000
180	紅梅図	鈴木松年		173.0×91.5cm	軸	墨画・部分膠彩	101050001000
181	神事	原在泉		131.2×49.6cm	軸	膠彩	117590001000
182	名和長年	豊島停雲		154.5×82.5cm	軸	膠彩	113500001000
183	柳鷺図	菊池芳文		123.5×50.0cm	軸	墨画	100590001000
184	絵専美工両校校友会揮毫画巻	山元春挙・竹内栖鳳ほか16名		25.5×41.5cm	巻子（18図）	膠彩	100910001000
185	観楓図	神坂雪佳		127.1×77.0cm	額	膠彩	132070001000
186	佐伎母理	猪飼嘯谷		212.5×102.5cm	額	膠彩	129340001000
187	神苑図（右隻）	都路華香		123.0×264.0cm	屏風（6曲）	膠彩	132780001001
188	鹿（金地扇面）	木島桜谷		24.3×54.5cm	軸	膠彩	100630001000
189	晩秋	徳岡神泉		169.5×175.5cm	額	膠彩	118980001000
190	蜑邨暮靄	川村曼舟		201.3×114.5cm	軸	膠彩	130440001000
191	早春	榊原苔山		167.3×253.4cm	屏風（4曲）	膠彩	133150001000
192	花鳥図	望月玉成		253.3×175.5cm	軸	膠彩	125000001000
193	芥子	濱田観		135.0×192.2cm	屏風（3曲）	膠彩	130200001000
194	有明	三輪晁勢		206.4×181.8cm	額	膠彩	128430001000
195	篁	猪原大華		192.5×135.0cm	額	膠彩	136250010000
196	樹	山口華楊		185.0×140.0cm	額	膠彩	118520001000
197	雨期	秋野不矩		150.0×200.0cm	額	膠彩	119540001000
198	裸婦　画稿	村上華岳		170.5×107.5cm	額	墨画	101160001000
199	懺悔　画稿	中村大三郎		218.0×86.6cm	額	墨画・部分膠彩	132730001000
200	紡績工場図	田中苔石		112.0×150.5cm	額	木炭描	118440001000
201	能道具図	伊藤快彦		43.5×123.5cm	額	油彩	132120001000
202	琵琶湖風景	浅井忠		18.0×26.3cm	額	水彩	112040001000
203	晩秋の山	池田遙邨	池田遙邨絵画資料	24.7×33.8cm	まくり	水彩	139080016000
204	信州風景	村山槐多		32.4×49.0cm	額	水彩	118900001000
205	暮秋好處	黒田重太郎		139.5×171.3cm	額	油彩	111800001000
206	走鳥	須田国太郎		90.5×73.0cm	額	油彩	111780001000
207	山城平野の夕日	太田喜二郎		63.5×79.0cm	額	油彩	131050001000
208	疏水	川端彌之助		50.0×72.7cm	額	油彩	118490001000
209	大獅子	大村西崖		89.8×78.0×33.6cm	立体	彫刻	109010001000
210	第一歩	石本暁曠		58.8×32.0×23.0cm	立体	彫刻	109040001000
211	幸野楳嶺胸像	北村西望		91.5×80.5×51.5cm	立体	塑造	133570001000
212	目は口であり、口はまた目である	辻晉堂		72.0×62.0×13.0cm	立体	焼成	128460001000
213	フランスの男	山本恪二		96.5×29.0×21.0cm	立体	鋳造	120810001000

4　工芸に学ぶ

214	色絵橋人物図鉢	作者不詳		7.1×37.5×36.8cm	立体	焼成	129930001000
215	黄瀬戸芦文茶碗	作者不詳		7.5×8.6×8.6cm	立体	焼成	105360001000
216	色絵松竹梅文四方皿	作者不詳		2.9×17.7×17.9cm	立体	焼成	105430001000
217	色絵七宝透文手焙	作者不詳		19.8×25.8×17.7cm	立体	焼成	105140001000
218	瀬戸釉筒水指	野々村仁清		17.9×13.9×13.2cm	立体	焼成	105250001000
219	色絵檜梅文水指	尾形乾山		24.5×19.5×16.9cm	立体	焼成	105190001000
220	交趾写鳳凰文菓子器	浅井周斎		4.1×17.8×17.6cm	立体	焼成	105100001000
221	銹絵雲鶴文急須	青木木米		8.8×11.1×10.5cm	立体	焼成	105370001000
222	銹絵暦文茶碗	高橋道八（二代）		7.7×12.0×12.0cm	立体	焼成	105310001000

通番	名称	作者不詳	備考	法量（縦×横×奥cm）	形状	技法	収蔵番号
223	飴釉金彩葡萄葉形鉢	高橋道八（三代）		12.0×29.6×29.6cm	立体	焼成	105630001000
224	加彩猿置物	角倉一方堂		16.2×13.4×21.3cm	立体	焼成・膠彩	105600001000
225	染付雲堂文火入	永楽保全		7.9×11.0×11.0cm	立体	焼成	104650001000
226	黒楽茶碗	楽宗入（楽五代）		8.3×10.7×10.7cm	立体	焼成（楽）	105340001000
227	金地鶴図色絵角皿	伊東陶山	京都市工業試験場旧蔵品	2.8×19.0×18.8cm	立体	焼成	129390027000
228	向日葵花瓶	清水六兵衛（六代）		38.5×28.5×28.5cm	立体	焼成	111690001000
229	染付陶板「曲る道」	富本憲吉		26.8×26.8×0.7cm	額	焼成	136710001000
230	布士の歌染付皿	近藤悠三		5.5×34.6×34.6cm	立体	焼成	128590001000
231	壁体	八木一夫		49.7×73.0×11.6cm	立体	焼成	120620001000
232	灰陶博山炉	作者不詳		23.2×23.5×23.0cm	立体	焼成	106720001000
233	緑釉博山形酒尊	作者不詳		19.4×16.6×16.6cm	立体	焼成	106710001000
234	白地鉄絵詩文文壺	作者不詳		20.9×18.2×18.2cm	立体	焼成	105660001000
235	青花花鳥文稜花中皿	作者不詳		3.6×15.3×15.3cm	立体	焼成	104990001001
236	染付大壷	作者不詳		44.5×45.0×45.0cm	立体	焼成	106220001000
237	三面宝珠紋裂	作者不詳		21.8×15.0cm	ガラス板挟	織成	101490001000
238	黒地花文様縫箔裂	作者不詳		24.5×22.1cm	ガラス板挟	織成	101440001001
239	蓮華文綾幔裂	作者不詳	谷口香嶠旧蔵染織資料	18.8×34.7cm	ガラス板挟	織成	102010001000
240	松皮菱に桧垣桜花模様辻ケ花摺箔裂	作者不詳	谷口香嶠旧蔵染織資料	31.1×14.2cm	ガラス板挟	織成・染色	101360001000
241	白地飛鶴御所車文様辻ケ花裂	作者不詳	谷口香嶠旧蔵染織資料	27.0×21.5cm	ガラス板挟	織成・染色	101370001001
242	黒綸子地水に御簾文様縁金箔鹿子小袖	作者不詳		130.0×113.0cm	平面	織成・染色	120630001000
243	浅黄色縮緬地綿畑大文字散文様小袖	作者不詳		134.0×115.0cm	平面	織成・染色	120650001000
244	小忌衣	作者不詳		297.0×176.0cm	平面	織成・縫製	103810001000
245	三十三間堂内陣図屏風	稲垣稔次郎		51.5×176.0cm	屏風（2曲）	型染	112020001000
246	雨	小合友之助		167.6×185.2cm	屏風（2曲）	蝋染	118470001000
247	ゴブラン織壁掛	作者不詳	神坂雪佳将来品	177.5×134.7cm	平面	織成	104020001000
248	更紗裂帖	作者不詳		29.0×24.5cm	折帖	蝋染	104100001000
249	花鳥扇文更紗腰衣	作者不詳	インドネシア美術調査団収集品	102.0×256.0cm	平面	蝋染	118660001000
250	銅製薬缶	作者不詳	アフガニスタン民族資料	19.3×14.7×18.5cm	立体	鍛金	120400037000
251	菊桐紋蒔絵手桶	作者不詳		43.7×39.0×39.0cm	立体	蒔絵	107400001000
252	挿秧人物蒔絵盆	作者不詳		25.6×39.5×3.3cm	立体	蒔絵	107170001000
253	黒赤漆高坏	作者不詳		30.0×38.5×38.5cm	立体	髹漆	107310001000
254	叭々鳥密陀絵盆	作者不詳		1.6×27.2×27.1cm	立体	密陀絵	111900001000
255	高士談棋草花密陀絵重箱	作者不詳		20.3×16.9×16.9cm	立体	漆絵・密陀絵	107120001000
256	波蒔絵久和良形香合	金森宗和		12.5×12.5×2.5cm	立体	蒔絵	106940001000
257	果樹堆朱食篭	作者不詳		19.6×19.6×7.5cm	立体	堆朱	107190001000
258	面壁達磨鎌倉彫香合	作者不詳		9.0×9.0×3.2cm	立体	鎌倉彫	106880001000
259	蟹蒔絵硯蓋	永田友治		4.5×25.8×25.8cm	立体	蒔絵	107230001000
260	絵変蒔絵行厨	作者不詳		30.6×33.4×17.7cm	立体	蒔絵	107180001000
261	片輪車千鳥蒔絵酒温器	作者不詳		29.0×28.8×15.0cm	立体	蒔絵	107220001000
262	人物蒔絵印篭	塩見政誠		7.7×5.2×2.3cm	立体	蒔絵	106770001000
263	仙女唐子草花螺鈿食籠	作者不詳		22.3×12.8×12.8cm	立体	螺鈿	107240001000
264	蒟醤十角盛器	作者不詳		27.8×27.8×9.0cm	立体	乾漆	107160001000
265	黒漆鼠短檠	作者不詳		71.0×34.6×29.0cm	立体	髹漆・著彩	107460001000
266	漆塗手板	作者不詳		21.3×30.1×16.3cm	立体	蒔絵	107390001000
267	春馬蒔絵飾盆	平舘嘉邦		29.8×29.8×6.6cm	立体	蒔絵	121090001000
268	左義長羽子板	作者不詳		52.0×15.4×1.1cm	立体	木工・膠彩	109560001000

通番	名称	作者不詳	備考	法量（縦×横×奥cm）	形状	技法	収蔵番号
269	源氏三十六歌仙歌かるた	作者不詳		8.2×5.5cm	平面（162枚）	膠彩	110150001000
270	馬繪かるた	作者不詳		9.3×6.4cm	平面（99枚）	膠彩	110170001000
271	鼈甲台波に鯛透彫櫛	作者不詳		7.2×14.7×0.5cm	立体	鼈甲細工	110560001000
272	銀珊瑚入梅牡丹に桜びらびら簪	作者不詳		20.1×3.3×11.7cm	立体	彫金	110800001000
273	霊亀形煙硝筒	作者不詳		20.0×13.0×5.0cm	立体	彫刻	108160001000
274	扇象嵌鐙	作者不詳		24.0×13.0×25.5cm	立体	鍛金・彫金	108080001000
275	茱萸袋	作者不詳		60.0×30.0×15.0cm	立体	手工	111420001000
276	這子	作者不詳		71.3×21.0×11.0cm	立体	縫製	110480001000
277	次郎左衛門頭立雛	作者不詳		男雛：29.2×14.7×3.9cm 女雛：23.3×6.1×3.3cm	立体	紙工	110460001000
278	相良人形　座美人	作者不詳		11.5×14.0×7.4cm	立体	焼成・膠彩	109950001000
279	書院の武者	井浦狂阿弥	江馬務吉川観方監修風俗人形	23.0cm	立体	焼成・膠彩	110180013000
280	壁紙《花園》	上野リチ	上野リチデザイン資料	107.7×76.1cm	額	セリグラフ	140270001000
281	大太鼓	作者不詳	ニューギニア民族資料	64.0×239.0×49.0cm	立体	彫刻	125710073000
282	かまど	作者不詳	ニューギニア民族資料	31.5×59.0×57.0cm	立体	焼成	125710149000
283	棟飾り	作者不詳	ニューギニア民族資料	41.7×20.5×25.5cm	立体	焼成・著彩	125710186000
284	壷（サゴヤシ澱粉貯蔵用）	作者不詳	ニューギニア民族資料	45.0×41.5×41.5cm	立体	焼成・著彩	125710184000
285	語る人の椅子	作者不詳	ニューギニア民族資料	120.0×41.0×43.5cm	立体	彫刻・著彩	125710057000

5　学舎の証し

286	孤村流水	幸野西湖	市工絵画科卒業作品	153.5×83.5cm	軸	膠彩	200380001000
287	少女	戸田天波	市工絵画科卒業作品	152.0×84.0cm	軸	膠彩	200530001000
288	笠置落城	川畑春翠	市工絵画科卒業作品	82.5×154.0cm	軸	膠彩	200470001000
289	春光	北垣静処	市工絵画科卒業作品	154.5×83.5cm	軸	膠彩	200370001000
290	厩戸皇子	清水古関	市工絵画科卒業作品	155.0×83.0cm	軸	膠彩	200720001000
291	暗中出手	岡文涛	市工絵画科卒業作品	155.0×82.3cm	軸	膠彩	200670001000
292	恨涙	岸米山	美工絵画科卒業作品	153.0×84.0cm	軸	膠彩	200780001000
293	夕陽	高倉観崖	美工絵画科卒業作品	153.0×84.0cm	軸	膠彩	201310001000
294	春雨	入江波光	美工絵画科卒業作品	152.0×84.5cm	軸	膠彩	201270001000
295	狐	渡辺与平	美工絵画科卒業作品	84.5×148.0cm	軸	膠彩	201550001000
296	羆	村上華岳	美工絵画科卒業作品	144.0×83.0cm	軸	膠彩	201760001000
297	兎	松浦舞雪	美工絵画科卒業作品	145.0×82.5cm	軸	膠彩	201730001000
298	軍鶏	榊原紫峰	美工絵画科卒業作品	144.0×82.5cm	軸	膠彩	201740001000
299	水汀	徳岡神泉	美工絵画科卒業作品	175.0×94.0cm	軸	膠彩	202500001000
300	雨後（右隻）	福田平八郎	美工絵画科卒業作品	145.5×310.0cm	屏風（6曲）	膠彩	202660001001
301	銃響	前田荻邨	美工絵画科卒業作品	151.6×240.0cm	屏風（4曲）	膠彩	202830001000
302	柔かき日蔭	中村大三郎	美工絵画科卒業作品	157.5×268.0cm	屏風（4曲）	膠彩	202820001000
303	幽遠	玉城末一	美工絵画科卒業作品	147.3×250.0cm	屏風（4曲）	膠彩	202800001000
304	豹	稲垣仲静	美工絵画科卒業作品	142.0×139.4cm	屏風（2曲）	膠彩	202970001000
305	鷲	清水六兵衛（六代）	美工絵画科卒業作品	164.5×225.0cm	屏風（4曲）	膠彩	203430001000
306	赭土	野添草一	美工絵画科卒業作品	142.0×98.0cm	額	膠彩	205870001000
307	丘の樹	吉岡茂夫	美工絵画科卒業作品	78.7×115.0cm	額	膠彩	206000001000
308	冬木	中井俊一	美工絵画科卒業作品	112.0×78.3cm	額	膠彩	206200001000
309	婦人衣装図案	奥村耕仙	市美乙部工芸図案科卒業作品	170.0×106.5cm	額	膠彩	200010001000
310	英雄末路図	岐美竹涯	市工図案科卒業作品	135.5×71.8cm	軸	膠彩	200200001000
311	友禅図案	沢田宗山	市工図案科卒業作品	83.0×103.5cm	軸	膠彩	200600001000

通番	名称	作者不詳	備考	法量（縦×横×奥cm）	形状	技法	収蔵番号
312	装飾図案	猪飼嘯谷	市工図案科卒業作品	116.0×99.5cm	軸	膠彩	200620001000
313	朝昼夕意屏風図案	梅戸在貞	美工図案科卒業作品	123.0×123.0cm	軸	著彩	200980001001
314	化粧棚図案	三崎雍府	美工図案科卒業作品	105.5×88.0cm	軸	著彩	201080001000
315	藤花蒲公英応用卓被図案	秦テルヲ	美工図案科卒業作品	106.0×107.5cm	軸	著彩	201220001000
316	芍薬模様衝立図案	高橋五山	美工図案科卒業作品	74.0×80.5cm	軸	著彩	201390001000
317	源氏紅葉賀之意書院飾器具之内硯箱置時計図案	原在寛	美工図案科専攻科修了作品	86.0×74.5cm	軸	著彩	201450001000
318	菖蒲模様屏風図案	古東淡山	美工図案科卒業作品	81.0×142.0cm	軸	著彩	201380001000
319	春興之意壁掛図案	千熊章禄	美工図案科卒業作品	93.5×94.5cm	軸	著彩	201600001000
320	秋の野蒔絵屏風図案	伊吹蘚石	美工図案科卒業作品	123.0×129.0cm	軸	著彩	201770001000
321	芥子応用寝台掛図案	布施喆詮	美工図案科卒業作品	235.5×89.0cm	軸	著彩	201830001000
322	モザイク壁飾図案	小合友之助	美工図案科卒業作品	171.5×87.0cm	軸	著彩	202850001000
323	段通図案	塚本圀太郎	美工図案科卒業作品	65.6×271.0cm	巻子	著彩	203840001000
324	タイル（陶板）図案	森田富次郎	美工図案科卒業作品	154.0×183.5cm	軸	著彩	204610001000
325	夜会服図案	宇佐美滝三郎	美工図案科卒業作品	178.5×139.0cm	額	著彩	205130001000
326	装飾電灯図案	松本清	美工図案科卒業作品	198.5×109.5cm	軸	著彩	205290001000
327	ポスター図案（オリンピック六題）	竹岡義雄	美工図案科卒業作品	各86.6×60.5cm	額	著彩	205670001000
328	近代装飾家具図案	杉本正	美工図案科卒業作品	83.1×173.1cm 84.6×171.2cm	額	著彩	205780001000
329	ステンドグラス図案（温室景観）	吉田立治	美工図案科卒業作品	202.3×110.5cm	額	著彩	205820001000
330	染織屏風図案（東亜共栄圏内南方民族の踊り）	楠田信雄	美工図案科卒業作品	175.5×182.0cm	額	著彩	206020001000
331	漆器飾棚図案	塩谷元次	美工図案科卒業作品	120.0×149.5cm	額	著彩	206050001000
332	赤土山	榊原雨村	絵専卒業作品	155.5×172.5cm	屏風（2曲）	膠彩	201890001000
333	堺の相生橋	松宮芳年	絵専卒業作品	85.0×128.0cm	軸	膠彩	201900001000
334	二月の頃	村上華岳	絵専卒業作品	113.5×132.0cm	軸	膠彩	201910001000
335	南国	小野竹喬	絵専卒業作品代替品	68.5×68.0cm	軸	膠彩	201930001000
336	髪	土田麦僊	絵専卒業作品	80.0×85.5cm	軸	膠彩	201940001000
337	柾	柴田晩葉	絵専卒業作品	151.5×254.0cm	屏風（6曲）	膠彩	202050001000
338	短日の山	山口八九子	絵専卒業作品	190.0×56.0cm	軸	膠彩	202100001000
339	麗艶	森谷南人子	絵専卒業作品	166.5×110.5cm	軸	膠彩	202260001000
340	鸚鵡	鄭褻裳	絵専卒業作品	169.5×83.0cm	軸	膠彩	202460001000
341	今年竹	桒本一洋	絵専卒業作品	169.0×344.0cm	屏風（4曲）	膠彩	202610001000
342	路次の細道	丸岡比呂史	絵専卒業作品	166.0×190.7cm	屏風（2曲）	膠彩	202780001000
343	はなび線香	板倉星光	絵専卒業作品	163.0×180.0cm	屏風（2曲）	膠彩	202910001000
344	人形芝居	島田滴州	絵専卒業作品	161.3×168.0cm	屏風（2曲）	膠彩	202920001000
345	三輪	中野草雲	絵専卒業作品	200.0×98.0cm	軸	膠彩	202950001000
346	口紅	岡本神草	絵専卒業作品	136.0×136.0cm	屏風（2曲）	膠彩	203080001000
347	岬	高谷仙外	絵専卒業作品	64.5×197.0cm	軸	膠彩	203100001000
348	入相告ぐる頃（右隻）	吉川観方	絵専卒業作品	161.0×198.0cm	屏風（2曲）	膠彩	203110001001
349	三五夜中	佐藤光華	絵専卒業作品	215.6×83.3cm	軸	膠彩	203240001000
350	霰日	稲垣仲静	絵専卒業作品	132.0×99.5cm	軸	膠彩	203370001000
351	世相三題	堂本印象	絵専卒業作品	60.0×93.5cm	軸	膠彩	203530001002
352	花を持てる倭娘	岡山聖虚	絵専卒業作品	110.0×56.0cm	軸	膠彩	203630001000
353	風景	澤田石民	絵専卒業作品	68.0×87.0cm	額	膠彩	204310001000
354	葡萄	三輪晁勢	絵専卒業作品	148.0×136.0cm	屏風（2曲）	膠彩	203930001000
355	花鳥　椿	上村松篁	絵専卒業作品	82.0×69.0cm	軸	膠彩	203900001000

355の語り部 ―京都市立芸術大学のコレクション

著　者　松尾芳樹

発行日　令和元年 9月17日

発行者　京都市立芸術大学芸術資料館
610-1197　京都市西京区大枝沓掛町13-6
Tel 075-334-2232
http://libmuse.kcua.ac.jp/muse/

掛図と標本―美術工芸学校の教材

2019年9月17日㊋―10月20日㊐
京都市立芸術大学芸術資料館
主催：京都市立芸術大学芸術資料館、京都・大学ミュージアム連携

「京都・大学ミュージアム連携＋」による
「京都の伝統 Tradition of KYOTO」発信プロジェクト

令和元年度文化庁地域の博物館を中核としたクラスター形成事業

京都・大学ミュージアム連携
University Museum Association of Kyoto